

Z32-B88

修監 馬生島有 村藤崎島

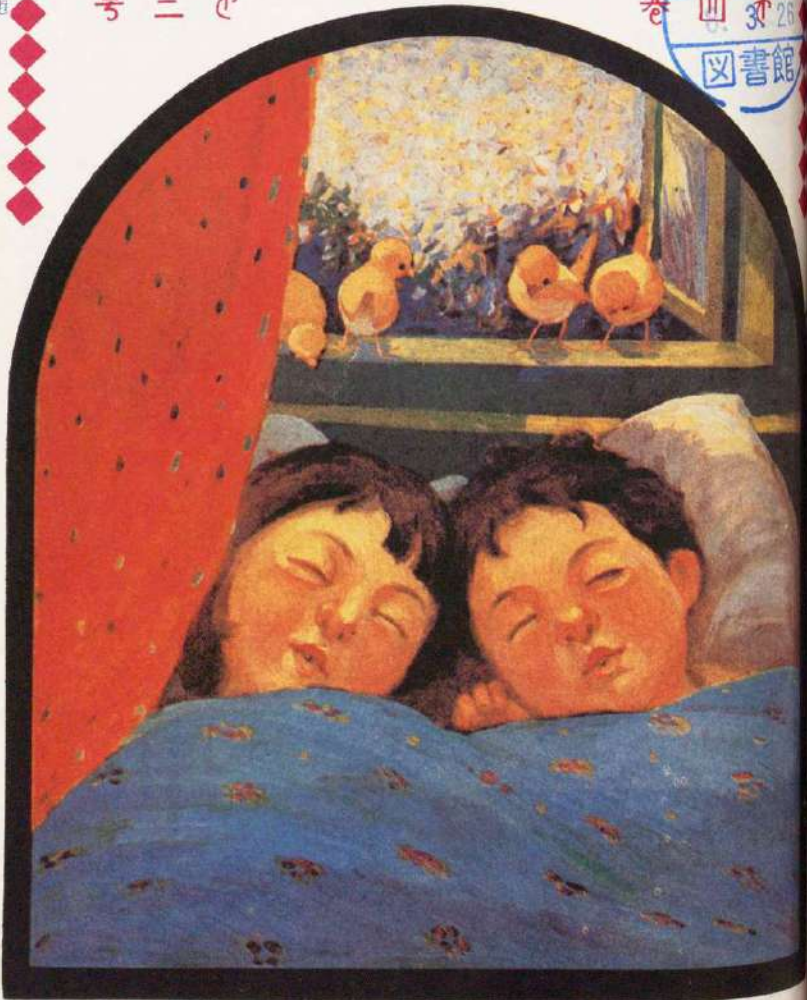
金の船

號月三

号三む

国立国会
図書館
巻四第26

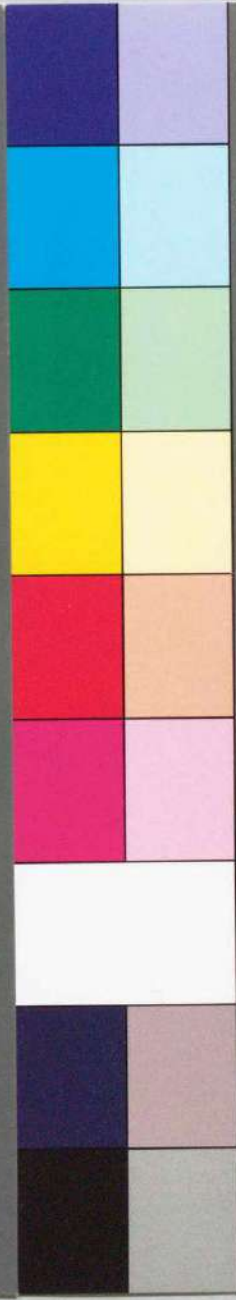
大正八年十月十六日第一種郵便物第三期一月一日發行



cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM, Kodak

平和記念東京博覧會

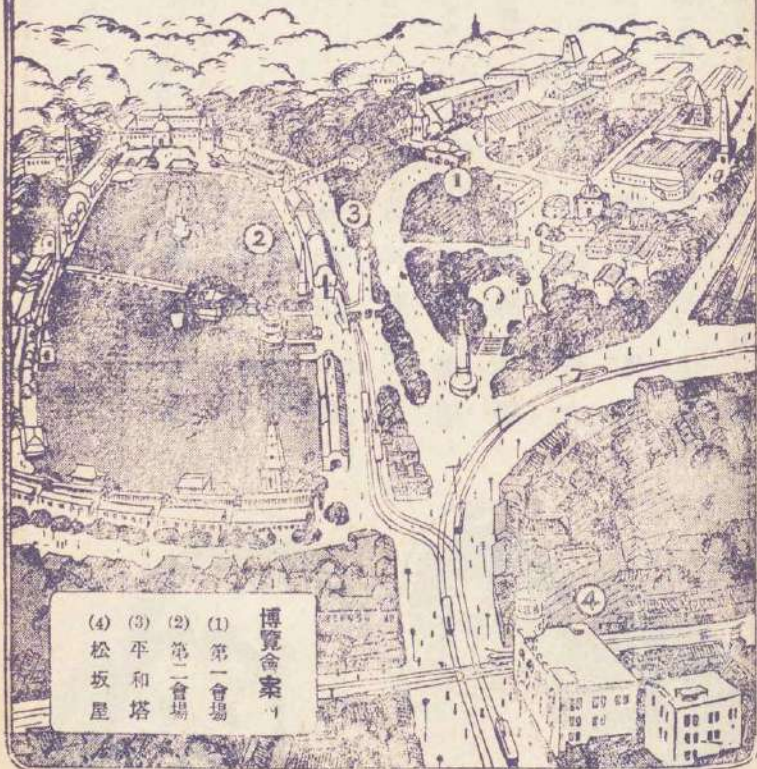
會期三月十日よ 七日三月十一日

余力を盡して、
良品廉價の實を
偏に大なる御來
臨を奉待上候



松坂屋といふ呉服店

怡も第三會場の觀
ある松坂屋は、一入
諸様の設備を整へ
商品を充實し



- 博覧會案
- (1) 第一會場
 - (2) 第二會場
 - (3) 平和塔
 - (4) 松坂屋

鷺印レコードの光榮

澄宮殿下
御作 童謠レコード

ツキトガン、キンギヨ、ユキ、タモザハガハ、ウマ、
ゴシヨカライソギ、四十四五

殿下御下賜の童謠に本居長世氏が作曲をなし愛嬢みどり子さん、喜美子さんと共に御前演奏の光榮に浴し殿下の御威を忝ふしたることは世上既に熟知の事實でございます御前演奏者が其時の儘に吹込みましたものは獨り鷺印レコードあるのみで他には絶對にありません

本社は献上御嘉納の光榮を頌たんがため汎く一般の御求めに應ずることに致しました敢て殿下の純真にして偉大なる御詩才に接せられんことをお勤め申上ます御作の外御前演奏の童謠「白まん」と、鳥の手紙、青い眼のお人形、お月さん、雪の夜、お山の大将、呼子鳥」等も買出して居ります

▽全國到る處の蓄音器店に於て發賣、鷺印と御指定を乞ふ△

株式會社 日本蓄音器商會

目次

お起きなさい春が来た(表紙・原色版)……………岡本 歸一

奇蹟の使者(口繪・三色版)……………二 野口 雨長

櫻と小鳥(童話)……………四 楠山 正雄

大法螺(童話)……………六 沖野 岩三郎

鳥さし長左(童話)……………六 沖野 岩三郎

病氣で寝た時に(童話)……………六 内藤 豊雄

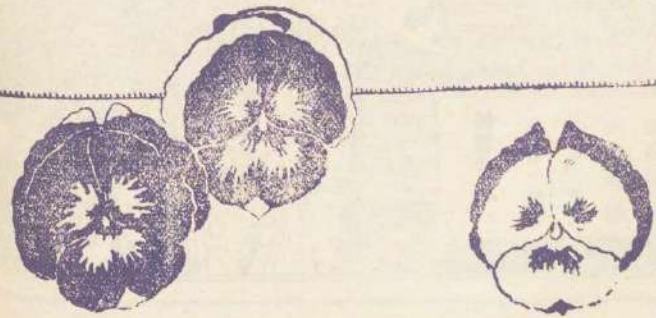
桃のお節句(童話劇)……………六 中島 孤島

星になった友を子にした話(童話)……………六 宮島 資夫

馬方(幼年時)……………六 望 清水 勝重

チツクの出世(童話)……………六 興 山本 作次

林の鳥(募集童話)……………五 野 口 雨情 選



金魚になった花子(児童童話)……………五 今 岡 伸

不思議な蘭(童話)……………六 西條 八十

夢の國(童話)……………六 突 霜田 史光

九官鳥(推薦童話)……………七 奈加島 佳代子

梅若丸物語(童話)……………七 齋 藤 佐次郎

兄弟(幼年時)……………七 山 本 鼎 選

川(幼年時)……………七 若 山 牧 水 選

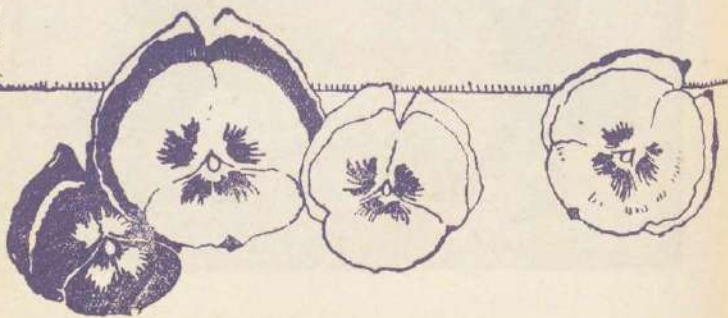
嵐の夜(童話)……………七 編 輯 部 選

通信……………七

(附 録)

長編物語 父戀し(第二回)……………沖野 岩三郎

——行方たづねに——





奇蹟の使者

|| 岡本綺一畫 ||

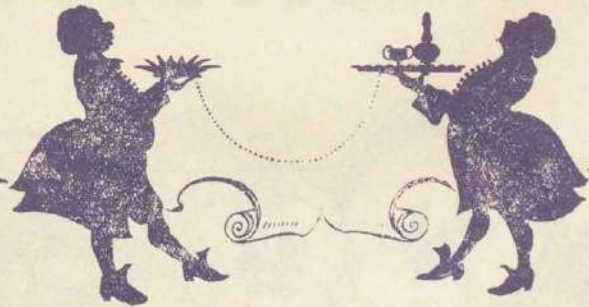
間もなく追っかけ追っかけ使者がやつて来て
 王様の足もとにつぶして顫へながら恐ろしい
 知らせを申しあげました。

陛下、お城の壁が六十間の間一どにぐらく
 崩れ落ちました。」と一人はいひました。

陛下、圓堂の柱が急に倒れました。すると、す
 ぐ圓堂が龜の子のやうにのそく海の方へ歩き
 出したのでございます。

と、もう一人の使者はいひました。

(大法師の十四頁を御覧下さい。)



野口雨情先生著 忽好評

童謡を讀み、童謡を作らむとする諸君は是非本書を御覽なさい。童謡作法の全般が一目にしかも精細に判ります。

童謡作法問答

新しい童謡の研究書として本書は目ざましく生れたり。

- 内容
- 童謡の作り方と質問
 - 童謡とはいつた何にか
 - 童謡は誰れでも作れるか
 - 童謡と唱歌との相違
 - 童謡と詩との相違
 - 童謡と民謡との相違
 - 童謡と小曲との相違
 - 童謡と民衆詩の相違
 - 空想の童謡と聯想の童謡
 - 童謡は長短何れが宜しいか
 - 童謡は讀べきか歌ふべきものか
 - 童謡にはどんな言葉を使ふか
 - 童謡を作る時の心得
 - 童謡は調子(韻律)が第一
 - 佳い童謡を作る方法
 - 後世まで残る童謡
 - 童謡と作曲及作曲家
 - 童謡を書いてゐる人々

台覽の光榮ある童謡集十五夜お月さん

抒情詩名作
叢書第三編

民謡詩集別

後 (第五版)

定価 一圓廿錢
送料 十錢

尙文堂 東京市神田區南三丁目一
町保神南區田神市京東
番四四三九一京東替振

製上 約價 三金 百壹 頁圓 十錢 送

(一の付前)金



會場前にて
向つて右より、岡本錦一氏、
田中牧師、沖野宮三郎氏、横
山壽馬氏、野口雨情氏、齊藤
佐太郎氏、



一回一第の部演講「船の金」
少たつ集。にて會後民市各々賦外市京東日八十二月一
。たして會ねん監編大、各百數女少年

おじぎはるはる



毎月一回発行
原色版四刷四枚一組
定価二十五銭
送料二銭

◆「金の船」愛読者のみな様からも、お姉さまお兄さまからも、学校の先生からも御賛成下さいまして澤山な御申込みを受けました。
◆「金の船」誌友の東京一愛読者から二百部と「少女界」愛読者の「界ちやん會」と申します會からは一百組も御註文を下さいました。
◆御申込みの時御住所と御名前をはつきり書いて下さい。代金は小爲替で願ひます御面倒でせうが。
◆きつと喜んでいたゞけると信じます。どうぞ澤山ためて私の畫集をこしらへて下さいませ。委しい事は正月號の廣告を御覧下さい。

東京市四谷區舟町拾壹岡本歸一

最新刊音樂書

野口雨情先生作歌
本居・中山兩先生作曲

故郷の唄

一冊 二十銭
送料二銭

〔附〕旅人の唄

故郷の唄は、慶應大學競走部應援歌として本居長世先生が作曲された有名な曲ですが昨今流行歌として青年男女學生間に歌はれてをります。又旅人の唄は、中山晋平先生が快心の曲でして殊に女學生向に歌はれてをります。

野口雨情先生作歌
中山晋平先生作曲

新童謡(1) **ポチの學校** 一冊 三十銭
送料二銭

ポチの學校には、螢の提灯、お山の鳥、花咲爺、鶯、赤牛黒牛の六つの歌がのつてあります。幼稚園から小學校の生徒さん達が、唱歌の代りに歌はれるやうに、皆なやさしい譜が付いてをります。

新童謡(2) 居眠り人形 (續刊)

◆好評音樂書◆

本居長世先生作曲

新民謡

三十銭づつ
送料二銭

- | | |
|----------------|--------|
| (1) さすらひの風の歌 | 先三木 露風 |
| (2) 夕 | 先伊藤小四郎 |
| (3) 別 | 先野口雨情 |
| (4) 關の夕さ | 先野口雨情 |
| (5) 白 | 先古 同 |
| (6) 咲いた | 先三木 露風 |
| (7) 砧 | 先古 同 |
| (8) 佐々紅華先生作歌作曲 | 先野口雨情 |

童謡唱歌

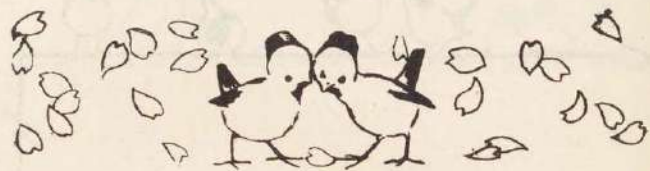
二十銭づつ
送料二銭

- | | |
|----------|-----------|
| (1) はだか虫 | (4) 鋤と |
| (2) 牧場の兎 | (5) 茶目子の一 |
| (3) 青い鳥 | (6) 毬やんの繪 |

白眉出版社

東京府下四品八六番五五四九八

〔すまりあに店器樂るな名有國全〕



櫻と小鳥

本居長世作曲

いーうた きかそ いーうた きかそ

さくらの はなの いーうた きかそ

こころのーうたーの いーうた きかそ

さくらのーうたーは このーこに きかそ

こころの うたは このーこに きかそ

あしーたの あさは このーこに きかそ

天下の少年は 大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新しいから
- 會費が安いから
- 指導が良いいから
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が速いから

會長 尾崎 行雄

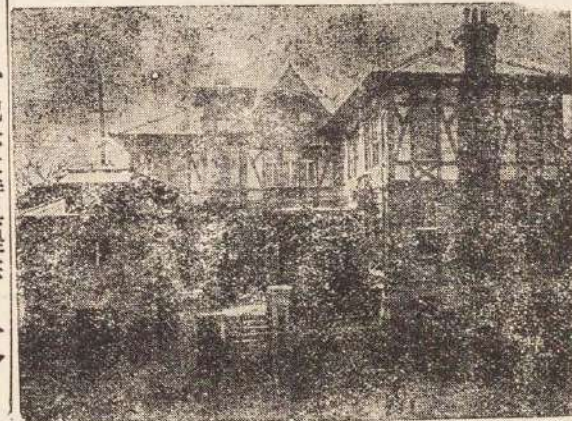
學監 文學博士 山内 隆吉
 新設博士 三宅 雄吉
 顧問 井上博士 浮田博士
 岡田前文務大臣

創立二十一年

記念大特典提供
 目下新學期開講

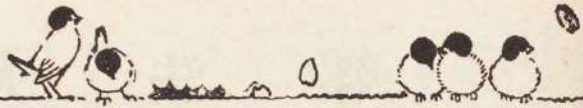
入會の絶好機

規則書無料進呈

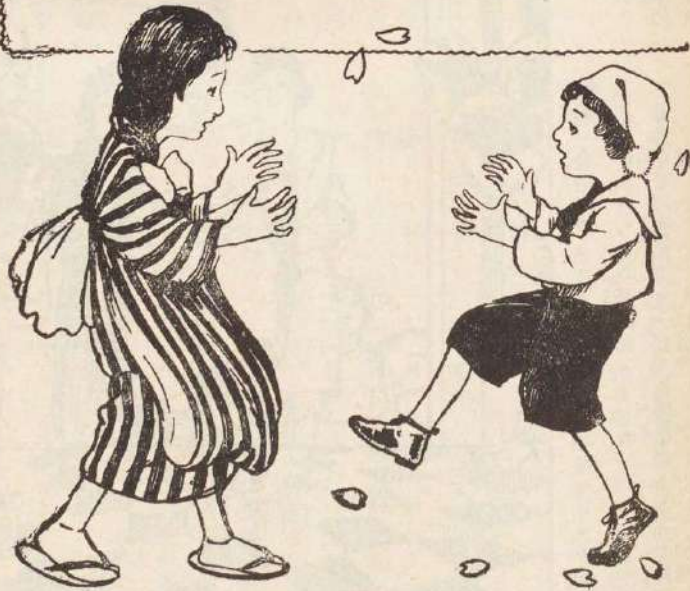


一人前の男となるには
 さうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はさうしても生存競争の勝者たることは六ヶしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンス出來てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗のある講義録で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京 駿河臺(お茶の水電通リ)
 大日本國民中學會
 振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇〇三
 神田三〇〇〇三
 神田三〇〇〇四



小鳥の唄は
 どの子に聞かせ
 櫻の唄は
 どの子に聞かせ
 あしたの朝は
 この子に聞かせ
 いい唄聞かせ



櫻と小鳥
 野口雨情
 櫻の花の
 いい唄聞かせ
 小鳥の唄の
 いい唄聞かせ
 いい唄聞かせ



大 法 螺

楠 山 正 雄



四分、今のフランス人の先祖に、シャルレマン大帝とよばれたえらい皇帝がありました。

その頃は、西洋でも一ばん耶蘇教のさかんな時でした。王さまでも、お大名でも、武士でも、平民で

椅子に腰をかけても見ました。

めでたく聖地の巡禮がすむと、シャルレマンはみんなをつれて、その時分コンスタンチノブルの都で威勢をふるつてゐたユーゴ王のお宮をたづねました。

王さまはお宮の中をきれいに飾り立て、シャルレマンの一行を迎へました。純金で作つたお宮の圓天井の下には、紅玉でこしらへためづらしい細工もの小鳥が、碧玉の藪のなかで歌をうたつてゐましたやがて御馳走のテーブルがならびました。おいしいさうな鹿の肉だの、猪の肉だの、雁や七面鳥や、孔雀の肉だのが山のやうにつままれてゐました。主人の王さまは大きな牛の角のおさかづきに、希臘や亞細アのめづらしいお酒をこぼれるほどついで、お客にすゝめました。シャルレマンと家來たちは、主人の王さまと王女のエレン姫のお祝ひだといつて、たくさんお酒をのみました。そしていゝ心持さうに酔つて大きな聲で笑ひながら、旅のおもしろい話をそれか

も、それは懐心ぶかづつて、懐かしくさす聖母マリアのお名をとなへます。侍がいくさに出るときでも、ちやうど日本の武士が八幡大菩薩にいのるやうに、天主さまにいのりました。

阿刺比亞の北のバレスチナには、ふるいエルサレムの都のあとがあつて、そこに耶蘇のお墓があります。歐羅巴の人たちは、はるく地中海の海をわたつて、耶蘇のお墓におまゐりをします。それを聖地の巡禮といつて、日本で三十三所の観音さまや六十六所の大師さまに巡禮するよりもつと大事なことでした。それは王さまでも平民でもかはりはありませんでした。

シャルレマン大帝は或時、お氣に入りの貴族を十二人お供につれて、聖ドニ寺のお上人さまから巡禮のもつ杖を頂いて、聖地の巡禮に出かけました。

十三人の人たちはエルサレムへ着くと、すぐ耶蘇のお墓におまゐりをして、それからむかし耶蘇が十二人のお弟子たちと坐つたといふ大廣間の十三ある

らそれとしつゞけました。

食事がすんでから、ユーゴ王はお客さまたちを寢部屋へ案内しました。その部屋はまあいとお堂のまん中に一本の太い圓柱が突き出してゐて、大きな圓天井を支へてゐました。こんなきれいな部屋はついぞ見たことがありません。目のさめるやうな金と紫の幕をかけた壁に向けて、十二人ぶんの寢臺が並べてありました。この外に一つ、とくべつに大きな寢臺が圓柱のわきにおいてありました。

この大きな寢臺の上にシャルレマンが横になると十二人の家来たちは外の十二の寢臺に休みました。そのうち飲んだお酒が體ぢゆうの血管を火の玉のやうにころげまはつて、頭が焼けるやうにあつくなりました。みんなはいくら目ぶたを合せて見てもよく眠られません。そこでシャルレマンの思ひつきで、みんなが賭をして、てんでに一つづつ大きなことをいひ合つて、その中で一ばんえらさうなことをいひつたものを勝にしようと言ひ出しました。みんなはさつ

するとルノー・ド・モン・ケベンが負けない氣になつて叫びました。

「お黙んなさい。オジエー伯爵、君が柱をひつくり返す間に、おれはこの建物ごとつい肩の上にひよいとのおせて海ばたへもつて行つて捨てしまふ。」

第五ばんめはジェラルド・ルーシヨン伯でした。伯はほんの一時間で、王さまのお庭の木をのこらす根こぎにしてしまふといひました。

ジェラルドの話がすむと、エイメー伯が自分の空想をはなしました。

「おれには海豹の皮でこしらへた魔法の帽子があつて、かぶればすぐ姿が見えなくなるのだ。それをかぶつた時、王の前のお皿からお魚をたべて、コップから葡萄酒をのんでやる。それから鼻をつまんで、耳を平手でくらはしてやる。けれどそんないたづらを誰がするの、王には分らないから、王はかんしやくをおこして、そばにゐる家来たちをのこらす半には

そく賛成しました。

「それでは、おれからはじめるぞ。」とシャルレマンはいひました。

「ユーゴ王の國の家来で一ばん強い武士を馬にのせ鎧物具に身を固めさせて、おれの前につれて來い。おれはたゞ一太刀に鎧武者を馬もろともまつ二つにきりわつて、そのあまつた切尖を地の中へ一尺まで切りこんで見せる。」

シャルレマンのあとにつゞいて、大法螺の口をきいたのは、ギヨーム・ドランジュです。

「おれは六十人力で上がらないやうな鐵の丸を、この王宮の壁にうちつけて、六十間も長い穴をあけてやる。」

三ばん目の大法螺はデンマルク人のオジエーでした。

「見たまへあの天井を支へてかうまんらしく立つてゐる大柱を。明日の朝おれはあいつをおしたふして薬のやうに、へし折つてくれるから。」

ふり込んで、ひどく膝をくらはせるだらう——それを見ておれは笑つてやるのだ。」

すると次の番に當つたユーオン・ド・ポルドーがにや／＼笑ひながら、

「ふん、おれならもつと器用に王さまの鼻毛をぬいてやる。知らない間に髯と眉毛を切り落してやる。それには、海豹の皮なんぞはいらないのだ。」といひました。

すると、ツレーンド・メイヤンスがそのあとから、おれは王さまの果物畑の無花果と、オレンジとレモンをのこらす、たつた一時間の間に食べつくして見せるといひました。

その次にはネーム公爵が、

「よしおれは王の饗應の間にはいつて、金の杯と金の銚子をのこらすつかみ出して、空の上を目がけてうんと高く月の世界までも投げ込んでしまふ。」といひました。

すると、ベルナルド・ブラバンがまげすに大きな



聲をほり上げて、

「何しろ、おれはこのコンスタチーノブルの町を流れてゐる大川を川底からひつくりかへして、その水をさんぶり町の上からあびせかけて、大洪水をおこしてやる。」とどなりました。

こんどは、ジェラルド・ド・ヴァイアースが、

「ふん十二人の武士をそこへ列べて見せるがいい。おれはこの剣の風だけで、十二人のこらす地びたに這はしてやる。」

さて十二ばんめになつたロトラン伯爵はかういひました。

「おれはこの角笛をもつて、町の外に出て行つて、一吹き吹いてやる、するとこの町の門といふ門は一度に吹きとばされてしまふ。」

これで大帝はじめ十二人の家來たちの大法螺がすみました。一ばんおしまひに十三ばんめにのこつたのは、中で一ばん若くつて勇ましい、皇帝のお氣に入りのオリグイエでした。

「オリグイエ、お前もみんなにまけずに、うんと大きなことをいつたらい、ぢやないか。」と王さまはそのかすやうにいひました。

するとオリグイエはにこ／＼笑ひながら、

「むかしギリシヤの勇士のヘルキユレスがある國の王さまのお宮をたづねた時、王さまの五十人の王女がヘルキユレスをしたつて、いざかへらうといふと、みんなどこまでも、とう／＼ヘルキユレスの國までついて來たといひます。この國のユーゴー王には五十人もたくさん王女はありますが、その代りたつた一人、この上なく美しいエレン姫があるのです。あしたの朝わたしたちがかへらうといふとき、きつとエレン姫はわたしをしたつて、どこまでもついて行くといふでせう。見ていらつしやい。これがわたしの大法螺です。」

かうオリグイエがとくいになつていつてゐる言葉のまだすまないうちに、どうでせう。

王さまを交へてゐた殿間の大柱はだしぬけに、ば

くんと口をあきました。この柱の中はうつろで、一人の人間がらくにはいつて、そつと何でも見たり聞いたりすることが出来るやうにこしらへてあつたのでした。

シャルレマンも十二人の家來たちも、ゆめにもそんなことは思はなかつたのですから、今その柱があいて、中から今の今まで勝手な噂をしあつたユーゴー王がぬつと出て來たのを見てぎよつとしました。王はもう血の氣のなくなるまで怒りきつてゐて、目ばかり火のやうにまつ赤にしてゐました。

王はその時氣味のわるいほどおそろしい聲で、「わたしが深切にもてなしてやつたそれが君たちの返禮か、無禮千萬な客人もあつたものだ。一時間わたしは辛抱して君たちがばか／＼しい大法螺の賭をして勝手な侮辱をわたしどもに加へるのを黙つてきてゐたのだ。さあ、それでは、皇帝、それから家來の貴族たちも聞いてもらはう。今夜はともかくゆるしておくが、明日の朝になつて、君たちの大法螺をして

も、けつこうな繻と錦襪の夜具にくるまつて、ぐうぐう高いびきをかいてゐました。

二

ぐつすり一寢入したと思ふと、もう明るる日の朝があけました。シャルレマンはじめみんなは、まだ半分お酒によつてゐるやうな氣持で、ゆふべのとはこ

の通に實行しなかつたら、すぐと一人のこらす首をきつてしまふから。」

かういつて、王はまた柱の中にはいつて行きました。それといつしよにわたした柱はつき目も見えないやうに合さつてしまひました。

しばらくの間、シャルレマンはじめさすがあばれもの、十二人もあつけにとられて、顔ばかり見合せてゐました。しばらくしてやつと口をきつたのは、シャルレマンでした。

「諸君お互ひに少し勝手な大法螺をふきすぎたぞ。まあ言はないに越したことはなかつたのさ。何しろすゐぶん飲み過つたので、とんだばかなことをやりかけたといふわけだ。それも罪はわたしに在る。わたしがわるい手本を出して見せたのだからな。まあ明日になれば、何とかこの危急をのがれる手だては考へる。さしあたりは、眠る工夫をしようぢやないか。いや、それではお休み。」

もうさういふかいはないに、皇帝も十二人の貴族

はい夢にでもおそはれたぐらゐに考へてゐました。ところがみんながおき出すと間もなく、もうさつそく兵隊がどや／＼やつて來て、みんなを王さまの前につれて行かうとしました。いよ／＼ゆふべの大法螺をほんたうに實行して見せよといふのです。

その時シャルレマンは家來たちに向つて、「よし、よし、行つて神さまと聖母においのりを



しよう。きつと聖母の加護で大法螺が大法螺でなくなるだらう。」といひました。

かういつて、シャルレマンはまつ先に立つて、いかにも神々しい、りつばな様子でしづかに進んで行きました。やがてユーゴー王のお官にはいると、シャルレマンはじめ、十二人の家来たちは、のこらず地びたに膝をついて、しつかり手を合せてねつしんに聖母をいのりしました。

「天國にまします聖母マリアさま、わたくしどもの危難をお救ひ下さいまし。あなたに捧げられましたあの白い百合の花のフランス王國のために、皇帝と十二人の貴族の命をお救ひ下さいまし。わたしたちの大法螺を眞實にする力を下さげ下さいまし。」

お祈をとなへてしまふと、もうみんなは、きつと聖母の加護の下ることを信じきつて、急に心持が晴れ晴れとなつて、元氣がからだ中にあふれて來ました。

ユーゴー王はその時玉座の上からいらした船



二二
癩聲で、家來たちに命令して、このフランスの客人たちを一人々々、つれて行かせて、てんであの無禮千萬な大法螺をどういふ風に實行するか、少しも早く見ようとしました。

そこで、柱をへし折つたり、礎物を肩にかつぐ管の人たちは、ゆふべ寝た圓堂の大廣間へ連れて行かれました。大川の底からひつくり返して大水をおこすはずのベルナルド・ブラバンは川の方へ、角笛をふいて町の門を吹きとばす管のローランは町の外へ、その外王さまのお庭へ、王さまの果物畑と、いろ／＼にわかれて、みんなわるびれた様子もなく勇ましく出て行きました。その中でシャルレマンと、オリヴィエの二人だけは、そのまゝお宮にのこつておりました。一人は一太刀でまつ二つに切る管の武士を待つために、一人はあとをしたつてどこまでもついてくる管の王女のエレン姫を待つためでした。

三

すると間もな
くだしぬげに、
けた、ましい物
音がおこりまし
た。それは人間
に世界の終りを
告げしらせる
最後の審判の嘯
吠かと思はれる
ほどでした。そ
の音がお宮の大
廣間まできこえ
るとあの碧玉の
枝にとまつてゐ
た紅玉の小鳥は
ふる／＼とふる
へて、びつたり
歌を止めました



王さまはあぶなく金の玉座からゆり落ちさうになりました。

それは大きな建物の壁のからく崩れおちる音でした。大水のどつと堤を切つて溢れ出す音でした。そしてその物音にもけされずに、耳をこななくに吹

はづませました。

ユーゴー王はこんどこそ、恐ろしさに血の気がなくなりました。そしてふるへながら口のうちに、「何といふことだ。フランスの客は魔法使ひであつたのだ。」とつぶやきました。

シャルレマンは唇に笑みをうかべながら、「ところで陛下、わたしの方へも、鎧物具で身を固めて馬にまたがった勇士を早く出して下さい。」

ユーゴー王はしかたがないので、家來中で一ばん強い武士に丈夫な鎧を着せ、大きな馬にのせて出しました。シャルレマンはたゞ一太刀で武士と馬をまつ二つにして、そのあまつたきつ尖を地の下に一尺あまり切り込みました。

これで十三人の大法螺ふきの中、十二人までは聖母の加護でりつぱに賭に勝つたのです。さて一ばんおしまひにのこつた若い勇ましいオリヴィエにだけ聖母のお恵みのかゝらない筈がありません。

十三人の法螺のうちで、ユーゴー王の一ばんがま

きとばすほどの高い喇叭の音がやがましく鳴りわたりました。間もなく町のそこからもこゝからも追つかけて追つかけて使者がやつて来て王さまの足もとでふるへながら王さまの足もとにつゝぶして、怪しい恐ろしい事件の知らせを申し上げます。

「陛下、お城の壁が六十間の間、一どにぐらぐらと崩れおちました。」と一人はいひました。

「陛下、圓堂の柱が急に倒れました。するとすぐその圓堂が龜の子のやうにのそくと海の方へ歩き出したのでございます。」ともう一人の使者はいひました。

「陛下、大川が舟も魚も一しよに、町の中にこぼれ出しました。すさまじい大水が今にもお宮の壁際までおしよせてまわります。」と三ばんめの使者が息を

んのならなかつたのは、一ばんおしまひのオリヴィエが、大事な王女をさも無造作にかはいらしい小犬でもつれて行くやうに、つれて行つてしまひさうにいつたことでした。あとの十二人はゆるしてかへしても、オリヴィエの首だけはきつと切つてやると、心の中で力んでゐました。

けれども一度オリヴィエと顔を合せると、王女はおとなしい、しかしはつきりとした調子で、「わたくしは御一しよに、フランスの國へまゐりたうございます。」といひました。

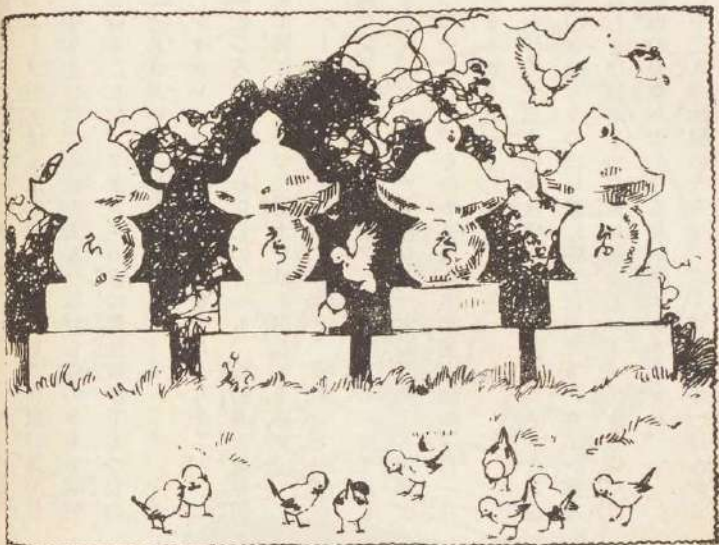
さう聞くとユーゴー王はさもいまゝしさうに、「よし、よし、このフランス人どもは、神さまと悪魔を兩方とも身方につけてゐるのだ。もうどうでもいゝやうにするがいい。」といひました。

かうしてシャルレマン大帝と十二人の貴族たちは聖地巡禮のおみやげに、美しいエレン姫をつれて、めでたくフランスの國にかへつたのです。(をばり)

鳥さし長左

沖野岩三郎

一六



昔、京の町外れに長左といふ鳥さしがありました。毎日朝はやくから長い藪竿を提げて家を出て行き、あちらの森の中、こちらの藪の蔭で、ちつちく、ちつちく、ちつちく、ちつちくと歌つてゐる雀を刺す事を仕事にしてゐました。

長左は鳥さしが大變上手でした。だから大抵毎日のやうに二十三十の雀を獲つて歸りましたが、その頃雀一羽の價が、たつた三文でしたから、一日に百文のお金を儲けようとするれば、餘程氣をつけて、一生懸命に雀を狙はねばなりませんでした。

けれども雀も生きてゐる動物です。それ相應に智慧があるので、毎日々々藪竿をさげて出て来る長左

の姿を見ますと、直ぐチツチク、チツチクと鋭い聲で互ひに誂め合つて、竿の届かない高い枝の上に飛んで行くやうになりました。で、だん／＼長左のお金儲けは少くなつて来ました。それに長左は大變にお酒が好きでしたから、毎晩々々其日に獲つた雀を賣つたお金で、必ずお酒を買つて飲む事にして居ました。お酒を飲めば直ぐ近所隣の人達に議論をしかけたり、喧嘩を吹きかけたりするので、村中の人達から、長左は除け物にせられてゐました。

或年の春でした。長左は例のやうに自分の家を出て、藪竿を提げながら加茂川堤の方へ行きました。すると堤の左側にある大きな古寺の後の竹藪の中で澤山の雀が、ちつちく、ちつちくと鳴いてゐるのを聞きました。

「うまい！ 今日朝ッばらから縁喜が善いぞ！ あいつを皆な捕つたら、お酒を五合は飲まれる……」長左は心の中でかう思ひながら、兩の手に藪竿をしつかと握つて、小腰を屈めて静かに竹藪の方へ歩

いて行きました。藪の中には五六羽の雀が、樂しうに羽ばたきをしながら、枝から枝へ飛渡つてゐましたが、其中の一羽が、格別大きな聲で、

「酒飲長左、酒飲長左。」と鳴きました。

吃驚した長左は、思はず藪竿を持直して藪の方を見ますと、雀は一齊に長左の方を眺めてゐました。

長左は羨ましさに雀の群を眺めてゐましたが、最う五六間も近寄らねば、竿の尖が届かないので、そつと芝生の上を二歩三歩歩くとまた一羽の雀が、

「来た／＼、酒飲長左！」と鳴きました。

「はて、不思議だ？」と長左が呟いた時、何百の雀は聲を揃へて、

「来た／＼、酒飲長左、来た／＼、酒飲長左……」

と鳴き立てながら、向うの森の方へ飛んで行きました。

「怪しからん奴ぢや、よし！ 今に見て居ろよ、貴様達を皆な獲つてやるから……」

長左は川を渡つて、森の方へ行きますと、森の裡

の枝にゐた一羽の雀が、
 「来た〜、酒飲長左、酒飲、酒飲々々々々〜」
 と鳴いてゐました。すると森の中の雀も一齊に、
 「来た〜、酒飲長左、酒飲々々々々。」と鳴きなが
 ら町の方へ飛んで行きました。今度はもう何千羽と
 も知れない澤山の雀の群でした。
 「また逃げをったナ！ 今に見ろ皆な獲つてやるか
 ら〜。」と云ひながら、また長左は大急ぎで町の方
 へ走つて行きました。そしてドン〜と十四五町も
 走つたと思ふ頃、後から、
 「もし〜長左さん、何所へ行らっしゃいます、そ
 んなに泡を食つて？」と呼びかける者がありました。
 振り返つて見ますと、それは鳥屋の五平さんでした。
 「私は今、雀を追ッかけてゐる所です。」
 「雀を？ 雀が何所へ逃げたのです？」
 「あの町の向うの五重の塔の方へ〜。」
 「一羽ですか、二羽ですか。」
 「いえ、四五千の大群です。」

「あア、さうか。道埋で、私は今、ゴアツ〜と
 いふ嵐のやうな音を聞いたが、それは其の雀の群の
 飛ぶ音だつたのか。」
 五平は五重の塔の方を見ながら、然う言つたが、
 急に思ひついたやうに、
 「長左さん、あなたは其の藪竿一本で何千といふ雀
 の群を、どうして獲るつもりです？」と尋ねました。
 尋ねられて始めて氣のついた長左は、眼を圓くし
 てキョロ〜五平の顔を眺めてゐるばかりでした。



「あなたが其の竿で、群の中の唯ッた一羽を刺せば、
 残りの雀は皆な飛んでしまひますよ。だから長左さ
 んあなたは、奇術でも使つて彼の雀を皆な一度に獲
 る事を工夫しなければいけませんネ。」
 五平はからかふやうに、さう言つてハ、と笑ひ
 ました。



毎日お酒を飲んで、喧嘩をしつけてゐる長左は、
 五平にかう調戲はれた事を、大層立腹しました。で、
 「何だい？ 俺は鳥刺専門だぞ、此の藪竿一本あり
 やア、一度に何千何萬の雀でも獲つて見せるわい〜」
 と呶鳴りながら、とすん〜と地べたを踏み鳴らし
 ました。
 五平は自分が、少しく言ひ過ぎたのを後悔しまし
 たから、
 「あア、さう〜、あなたは鳥刺専門です。そりや
 ア私が悪かつた。どうぞ御勘辨下さいまし。私は謝

りますから。」と云つて、三回も五回も丁寧に頭を下
 げました。
 「さう、あなたの方から折れて来るなら、私も別に
 腹は立てません。」
 長左は言ひ捨て、また、さつさと五重の塔の方へ
 走つて行きました。
 その後姿を見送つてゐた五平は、急に長左が可
 哀相になつたので、また大聲を出して、長左を呼止
 めました。そして路傍の酒店の表に据ゑてあつた五
 升樽を一つ買つて来て、

「長左さん、これを差上げますから、まア五重の塔の下で、一杯召上つて、それから彼の雀を獲る御工夫をなさいますし。」と言ひながらその酒樽を長左に渡しました。

酒好きな長左は、五升樽を貰つたので、夢ではないかと思ふ程喜びました。で、べこべこ〜と何度も何度も頭を下げて、

「有難うございました。この御恩は、一生忘れません。」と云つて、その樽を片手に提げて五重の塔の方へ走つて行きました。

塔の上には何千とも知れない雀が、最う長左の来たのは知らない風で、平生のやうに、チツチク、チツチクと鳴いてゐました。

「俺の来たのを知らないんだナ。よし〜今に皆な獲つてやるぞ！」

長左は竊竿を塔の軒の所へ立てかけて置いて、五升樽の栓を小石でコツ〜と敲き初めました。中では旨しきうな、お酒がトブン、トブンと鳴りました。

敵同、おだつたが、もう今日から仲善くしませうよ。ね、雀さん。」と言ひました。

雀は塔の上で頻りにチツチク、チツチクと相談してゐるやうでしたが、その中の嘴の黒い雀が一羽そうツと長左の側へ飛んで来て、

「長左さん、長左さん、あなたは最う今日限りで、鳥刺といふ商買をお止め下さいませよ。さうすれば、私達も安心して、毎日々々野原や森の中で歌つたり踊つたり出来ますから……」と申しました。

「では仲直りをしてくれるか。そんなら俺はもう今日から鳥刺は廢める！」

長左は眞實らしく言ひました。すると雀は大層喜んで塔の上へ飛んで行つたが、間もなく塔の上にある多勢の雀を、皆な誘つて来て、長左の四圍に集りました。

「長左さん、私のお父さまも、あなたに殺されましたが、もう今日から、あなたが鳥刺を廢めるなら怨まないで赦してあげます。」

やつと酒樽の栓を抜いた長左は、いきなり其所に口を押當て、

がぶ〜と飲みました。貧乏な長左は、今まで一度に三合以上のお酒を飲んだ事がなかつたので、もう夢中になつて、五升の酒を見る見る半分程飲んでしまひました。

長左はすツかり好い氣持になつてしまつて、石段を枕にして寝轉びました。そして塔の上を見上げながら、

「おい雀さん、お前さん達と俺とは、今まで

「長左さん、私のお母ア様も、あなたに殺されたのですけれど……」

「私の姉さんも、あなたに殺されたのですけれど……」

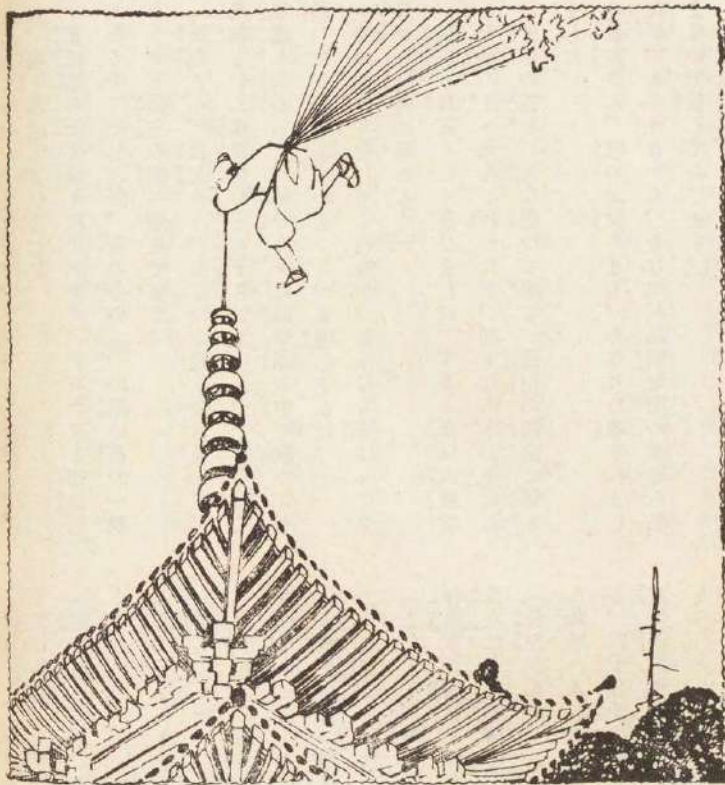
「私の兄さんも、」私の叔母さんも、」私の可愛い妹も……」

四千五千の雀は口々に、自分の身内が、長左に殺された事を言ひました。けれども皆な長左が鳥刺といふ酷たらしい商買を廢すなら、今日から仲よくしようと言ひました。

「よし〜、俺は最う今日限り鳥さしは廢す。さア仲直りに俺はお酒を御馳走してあげよう。」と云つて長左はまた酒樽の口を開けました。

「長左さんが、お酒の御馳走だつて、さアさ、皆さん此所へ入らツしやい。」と嘴の黒い雀が言ひますと、四千五千の雀の群は、大喜びで、めい〜に五重の塔の後の小山から木の葉の枯葉を拾つて來ました。そして其の枯葉を盃にして、長左からお酒





の御馳走に預りました。
長左は歌ひました。雀は踊りました。けれども暫くすると雀は皆な、コクリ〜と坐睡りをし初めました。
これを見た長左は急に例の悪い心を起して、その雀を皆な生捕つて鳥屋へ賣つてやうと考へました。そして周圍を見廻しますと、五重の塔の下に細い長い紐の捲いた大きな塊がありました。
「しめた！」と云つて長左はその紐を持つて来て、雀の兩足を根氣よく一々縛りました。一羽縛つてはその紐の端を自分の帯へ縛りつけ、また一羽縛つては自分の帯に縛り

つけ、たうと長い時間を費して、五千羽程の雀を皆な縛つてしまひました。

「さア、これで大丈夫！ 此の五千羽を買つて、新しい着物を買つて、お酒を貯つて、鯛を買つて……」そんな事を思つてゐるうちに、酒の酔ひが醒めて來たので、眼を覺した雀はすっかり自分達の足を縛られてゐるのを見て、吃驚仰天したやうに、一度にばた〜と飛び立ちました。

さア大變です、長左はその儘虚空遙かに引揚げられてしまひました。

「助けてくれ！ 助けてくれ！」と聲を限りに叫んでゐるうち、雀の群は、羽が疲れて來たと見え、また段々低く下の方へ飛んで來ました。その時、長左の眼の前に細長い棒のやうなものが見えたので、突如それに掴まりました。それは五重の塔の高い〜尖塔でありました。ほつと安心した長左は氣を落着けて下の方を見下しますと、其所には四人の小僧さんが、仰向いて塔の上を眺めながら立つてゐました。

「帯を解け、そして其の雀を飛ばしてやれ！」と僧さんの一人が言ひました。で、長左は片手で塔に掴まりながら、やつとの思ひで片手で帯を解きますと、五千の雀は足を縛られたまゝ、凄まじい音を立てて東の方へ飛んで行きました。暫くするとまた、「飛べ〜、其所から下へ飛べ〜」といふ聲が聞えました。長左は一度下の方を見直しますと、いつの間にか四人の小僧さんは大きな蒲團を持出して來て、其の四隅を掴んで立つてゐました。

それを見た長左は、大きな聲で、「その蒲團の中へ飛降りるから、力一杯四隅を掴んでおくれ、頼むぞ！」と云つて、何十間もある高い〜塔の上から、ふら〜と蒲團の上に飛び降りました。

「旨く蒲團の中へ落ちて來た長左が、どすん！ と芝生の上にお尻餅をついた時、長左の頭の上で、きやア！ といふ呼び聲が聞えたので、長左は吃驚して頭を上げますと、これは先ア何といふ事です。四人の小僧さん達は、餘まり堅く蒲團の端を握つてゐ



たので、長左がその真中へ飛び込んだ時、四人共一度に前の方へ、よろめいて四つの圓い頭をこつんと蹴しく一つ所でもかち合うたのでした。可哀さうに小僧さん達は見る／＼頭が酒樽のやうに大きく腫れ上つて死んでしまひました。それを見た長左は、「大變です、大變です、和尚さん、早く来て下さい。小僧さんが死にました。」と大聲で呼ばうとしましたが、どうしたものかちつとも聲が出ませんでした。

「もし／＼長左さん、竊竿が倒れておますよ。」といふ聲を聞いた長左は、吃驚して撥ね居きました。

「先ア、私は今朝から此所に寝てゐたのですか。」と長左は寢呆けた顔をして訊きました。

「さうですよ、随分長い日向ぼっこでしたネ。子供達が多勢来て、あなたのお金を弄つて居ましたよ。夫れから、あなたのお金の所、酒飲長左々々々と云つて、あなたを調戲つてゐましたよ。」

三人の小僧さん達が出て来たので長左は吃り乍ら、「もし／＼あなた方は、唯ツた今、頭と頭を搦ち合せて死んだのぢやありませんか。」と訊きました。けれども小僧さん達は、

「否エ、私達は今、御堂の中でお相撲を取つたので、和尚様に叱られて、甚く殿られました。死ぬ程の事はありませんでしたよ。」と云つて、小さい瘤の一つづつ出来た頭を長左の前へ差出しました。

夫れを見た長左は、涙をほろ／＼流しながら、「さうか、それで私も安心した。私も今日限りで鳥刺を廢します。あなた方も惡戯しないで一生懸命勉強なさい。」と申しましたが、小僧さん達には其の意味が解りませんので、不思議さうに各自自分の頭の瘤を撫でながら、眼をバチクリさせてゐました。

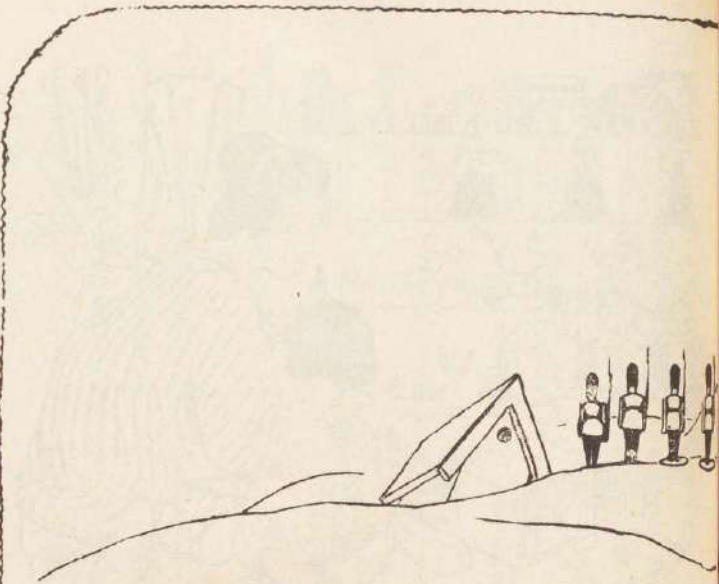
其時御堂の所から半身を現はした和尚さんは、「長左、鳥刺を廢した序に、お酒も廢さないか。そして、此寺のお墓番にならないか。」と申しました。

長左は大驚きで早速其日から、其の寺のお墓番になつて、一生懸命にお墓の掃除を致しましたので、二年の後は百兩のお金が貯りました。で、長左は其のお金で四つの石碑を建てました。それは長左の夢の中に蒲團の四隅を掴んだまゝ死んだ四人の小僧さん達のお墓だと云ふのでした。

石碑の建つた時、長左の夢には死んだが、實際は生きてゐる小僧さん達は、石碑の前で笑ひ轉げながらお経を誦みました。けれども長左は五重の塔の上を見上げて、「俺も偉くなつたもんだ。彼所から此所まで跳び降りて、能う先ア腰骨が挫けなかつたもんだ。」と眞面目に申しました。

平生ちつとも笑顔を見せない和尚さんも、其時だけは、ハ、ハ、と大きな聲で笑ひました。

今に其の石碑は、「四つ塚」と云つて京の町の或お寺の庭に残つてゐるさうです。そして年が年中、雀の群が其の石碑の側で、ちつちく長左、ちつちく長左と鳴いてゐるといふ事です。(ハをり)



敷布の小山うち越えて、
 時には船で艦隊づくり
 敷布の上であつちこち、
 または玩具の櫛や家を
 街のまはりに皆たてた、
 僕は枕の小山の上
 静かに坐る大男
 目の前に見る谷や原
 上掛の國はたのしいな、

(ステイアンソン)



病氣で寝た時に

内藤豊雄

僕が病氣で寝た時に
 枕を二つ持つてゐた、
 一日たのしく遊ばうと
 玩具をみんなそばへ置く、
 一時間ほど時々は
 鉛の兵隊を進ませた、
 服も練兵もさまざまに



桃のお節句

中島孤鳥

お節句の前晩のことでした。お母さんは床の間へかざった春子さんの雛壇の前へお車第だの、お小皿だの、お白酒の瓶だの、いろ／＼な可愛らしいお道具を並べて、上の壇の右と左には、桃の花を活けた花瓶を立て、そのすぐ下の壇へは、燭臺を置いた、赤い蠟燭を立てて下しました。春子さんはお母さんのそばへ坐つてお母さんの手のうごく通りに、目を動かして、嬉しそうににこ／＼して、おとなしく見てゐました。雛壇には、一番上に、春子さんの大好きな、美しい内裏様とお姫様が、金の冠をかぶつて、金屏風の前へ、行儀よく坐つておいでになりました。その次には、緋の袴をはいた五人の官女が、列んでゐます。そのうちには立つた人もあり、坐つた人もあり、めい／＼に何か手にもつてゐました。その次は五人轎子で、一番下の壇は、弓を持つて、矢を負つた矢大臣と左大臣でした。お母さんはお道具の架の中から人

お母さん、この兎はどうしたんでせう？ちつとも跳ねなくつてよ！
 かういばれたので、お母さんはちよいと春子さんの方へ顔をお見せました。
 お母さん。そんな筈はないが？もつと上手に跳ねさせてごらんなさい！
 春子。(兎をいぢりながら)それでも跳ねないんですもの！お母さん。さう。どれお見せなさい！(といひながらお母さんは兎を手に取つて、下の雛壇をいぢつて見て)あ、さうね、これは少し工合が悪くなつたやうだわ！去年はよく跳ねたのに、惜いことをしたねえ！

お母さん、お母さん、この兎はどうしたんでせう？ちつとも跳ねなくつてよ！
 かういばれたので、お母さんはちよいと春子さんの方へ顔をお見せました。
 お母さん。そんな筈はないが？もつと上手に跳ねさせてごらんなさい！
 春子。(兎をいぢりながら)それでも跳ねないんですもの！お母さん。さう。どれお見せなさい！(といひながらお母さんは兎を手に取つて、下の雛壇をいぢつて見て)あ、さうね、これは少し工合が悪くなつたやうだわ！去年はよく跳ねたのに、惜いことをしたねえ！

の間まで行つて来ますから、春ちゃんはお誰さまを見て、遊んであらつしやい、ね!

春 子。まだなほらないかしら?

といひながら手に取つて、跳ねさせようとしたが、やつぱり跳ねないので、兎をまた元のところへ置いて、今度はゴム鞠を見つけてつきはじめました。

(歌)

おんしやう正月 春景色、

お庭のうゝめが、咲きました、

さーいた小枝に、鶯が、

けーさも来てなく、ホーホケキヤウ、

ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、

ホーホケキヨウ、

春子さんは鞠をつきほつしては、幾度しつ拾ひなほして、同じ歌をくりかへしては、ついてゐましたが、だん／＼くたびれて来て、しまひには鞠をはふり出して、遠慮の附へ突進してし

なぐる／＼廻り出しました。

(歌)

開いた、開いた、

桃の花が開いた、

今日は三月 雛祭、

赤のご飯にお白酒、

お雛様には桃の花、

赤いな、赤いな、眞赤いな、

苔んだ、苔んだ、

桃の花が苔んだ、

開いたと思つたら、

見る間に苔んだ。

と歌ひながら、二三度くりかへして開いたり、苔んだりしましたが、それがすむと、今度は春子さんの真中へ坐らせて、眼を瞑らせて置いて、官女たちは手をつないで、歌ひながら、そのまはりを廻り出しました。

(歌)

まひ／＼つぶろ、

まひました。そのうちにお座敷の電燈がだん／＼暗くなつて、もう少しで消えさうになつたかと思ふと、まただん／＼と明るくなつて、今度は前よりも明るいくらゐになりました。見ると春子さんは畳の上へ顔をおつつけたまんまで、いつの間にかすや／＼と眠つてゐました。暫くすると次の間の襖が細目にあいて、その間から官女のやうな風をした、春子さんと同年ぐらゐの女の子がのぞきました。

官 女。春ちゃんー 春ちゃんー!

春子さんは頭をあげてキョロ／＼と室中を見まはしながら、

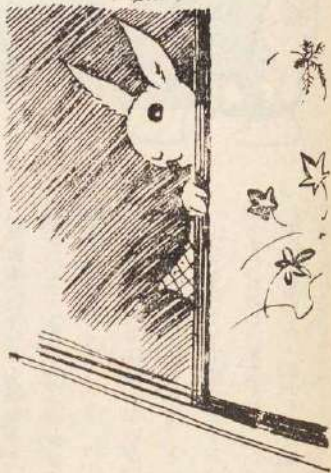
春 子。おや、誰が呼んだんだらう!

といつてゐるうちに、官女は襖をあげて、そろ／＼と入つて来ました。その後から同じやうな風をした、同年ぐらゐな女の子が四人續いて来ました。

官 女。春ちゃんー 春ちゃんー(といひながら、五人の官女は、目をまるくして、驚いてゐる春子さんのまはりを取巻いて)

さア／＼しよに遊びませう! 遊びませう!

と春子さんの手をとつて起させました。そして春子さんを入れて五人が一しよに手をつないで歌をうたひながら、お座敷の中



角だせ、槍だせ、

いゝものやるから、

やらうといふのになせ出さぬ、

どこへ行つたか蝙蝠ばかり、

頭も角も引込んだ。

歌つてゐるうちに、次の間から、はれ兎のやうな恰好をした子供がひよいとのぞきました。歌がすんだので春子さんは目をあいて、立上りましたが、その拍子に次の間の兎を見つけて、

春 子。おや、兎が来た! 兎が来た!

といつて嬉しうに手をたたくと、兎はもうピョンピョンと座敷の中へ跳込んで来ました。五人の官女はつないだ手をほどこいて、春子さんの中に、六人が一列に並んで、兎の方を向いて、手をたたくながら歌ひ出しました。

(歌)

うーさぎ、うーさぎ、お山のうさぎ、

お前のお耳はなぜ長いと歌ひながらだん／＼と後へさがります。兎は後座で立ちながら歌ひ出しました

(歌)

なぜかわたしは



知らないが、まあるい／＼月が出て、わたしのお耳はのびました。兎は歌つてしまふと、また跳出します。六人は手をたたくいて、だん／＼後へさがりながら、また歌ひ出しました。

(歌)

うーさぎ、うさぎ、お山のうさぎ、

お前はなぜにさう跳ねる？ 兎はまたそこへ立どまつて、歌ひました。

なぜかわたしは知らないが、まあるい／＼月を見て、いつもかうして跳ねます。歌つてしまふと、兎はまたピョン／＼と跳ね出しました。春子さんは嬉しがつて手をたたくながら、

と歌ふと、兎はまた立どまつて、

(歌)

なぜかわたしは知らないが、まあるい／＼月が出て、わ／＼の足がのびました。

歌つてしまふと、兎はまたピョン／＼と跳び出して、聲のした方へ入つてしまひました。すると襖の蔭から、また五人の官女が出て、いつの間にか雑壇の前へ突俯してゐる春子さんのまはりを通りながら歌ひ出しました。

(歌)

てんとう蟲、てんとう蟲、脚だせ、羽だせ、

いゝものやるから、向ふのお山へ飛んで行け、お山へ行つたら露を吸へ、露を吸つたら眼が覺めた！

春子。兎さん！兎さん！

こゝまでおいで！

といひながら春子さんは後さがりにお座敷の中を廻つてゐるうちに、官女はみんな襖の蔭へ入つてしまひまして、春子さんと兎と二人ざりて、暫くお座敷の中を廻つてゐましたが、そのうちに春子さんは、くたぶれて、雑壇の前へ坐つて、兎の跳ねるのを見てゐました。すると、次の間で、官女らが聲をそるへて、

(歌)

うーさぎ、うさぎ、お山のうさぎ、

お前の足はなぜ長い！





幕

早く来て見るんだつけ。
 春 子。お母さん、もう少し早く来ればよかつたのねえ。
 惜しかつたわ！
 お母さん。本當にねえ、(笑ひながら) さア春ちゃん、それぢやア、忘れないうちに、早く行つて、お父さんにその話をしておあけなさい、ね！
 お母さんは春子さんの手を引いて、障子の外へ出て行きました。



歌つてしまふと、官女たちは、手をほどいて、パター〜と襖の
 蔭へかけ込んでしまひました。同時に電燈がまただん〜と暗く
 なつて、もう少しで消えさうになつたかと思ふと、まただんだ
 ん明るくなつてゆきました。すると横側の障子がすうつと開い
 て今度はお母さんが入つて来ましたが、春子さんが畳の上へ突
 俯して眠てゐるのを見て、
 お母さん。春ちゃん！ 春ちゃんや！
 と側
 春子さんはまだ目がさめずに、突俯したまゝで、
 春 子。兎さん、兎さん！ こゝまでおいで！
 お母さんは、笑ひながらそこへ坐つて、春子さんを揺起しまし
 た。

お母さん。春ちゃんや！ 春ちゃんや！ 母さんですよ。
 春子さんはヤツと目がさめて、頭をもち上げて、まほりを見廻
 してゐましたが、お母さんを見て、驚いたやうな顔をしてゐま
 す。お母さんは笑ひながら、
 お母さん。春ちゃん、どうしました？
 春 子。お母さん、今面白かつたのよ！ 兎が来て、ピヨ
 ン〜跳ねながら、あたしを追かけるんですもの！
 お母さん。(笑ひながら) 春ちゃんは夢を見たんでせう！
 春 子。いゝえ、夢ぢやないわ！ お母さん、本當なのよ
 官女も来て、あたしと遊んでゐるんですもの！
 お母さん。(笑ひながら) 何をして遊んだの？
 春 子。「開いた開いた」をして。
 お母さん。まア、それは面白かつたわねえ。
 春 子。えゝ、本當に可笑かつたわ！ (とお母さんの膝へ手
 を突いて、面白さうに笑ふ) こゝへまた兎が来てピヨン〜跳
 ねるんですもの！
 お母さんは春子さんの手を取つて一しよに笑ひながら、
 お母さん。まアそれはさぞ可笑かつたらうねえ、お母さんも

千代高島

星になつた友を
子にした話

宮島 資夫

昔、支那のある町に、樂雲鶴と、夏平子と云ふ二人の人がゐました。家も近くでありましたし、年頃も丁度同じ位だつたものですから、子供の時から大變仲が好かつたのです。所が夏の方は小さい時から大變利口で、十位の時には町中でも夏の名を知らない人はない位、評判になりました。それでも樂は別にやきもちを燒くでもなく、夏を大事にしますし、夏



もまた自分と同じやうに樂に勤めて勉強させましたので、樂の學問も日に／＼進んで、やがて二人の名前が同じやうに評判になつて來ました。その中に二人とも大人になつて、夫人も子供も出

來ましたが、或る年悪い病が流行つた爲めに、夏はその病氣にかゝつて死んでしまひました。けれど夏の家は大變貧乏してゐたので、そのお葬ひも出す事は出来ないやうな有様なので、樂は自分の家の物を賣つたり何かして、漸くそれを濟ませてやりました。その後も一生懸命になつて働いて、自分が一升のお米を買へばその半分を夏の夫人や赤ん坊の所へ持つて行つて、憐れな遺族を扶けてゐました。そのお蔭で、亡い夏の夫人や子供も漸くその日その日を過す事が出來てゐました。これが爲めに樂の名前は益々評判になつて來ましたが、貧乏してゐる事はいつも變りなく、一人の腕で二軒の家を養つて行く爲めに、樂の苦しさは一通りではありませんでした。或る時樂は嘆いて云ひますのには、

「あなた失禮ですが、もしかお腹がすいておいでなさるのではありませんか。」と訊ねました。けれどもその人は黙つてゐますので、構はずご飯を取つて出しますと、手づかみにして直ぐ喰べてしまひました。そこでまたお代りを出すとそれも喰べてしまひました。樂は今度は茶店の主人に頼んで、豚の肩の肉を割かして、それで蒸餅をつくらせて出しますと、これも五六人前喰べてしまひました。するとその人は

はじめて、

「どうも有難うございました。お蔭でお腹が、一杯になりました。三年この方まだこんなにおいしい御馳走をお腹いっぱい喰べた事はありませんでした。」と嬉しさうにお禮を云ひました。そこで樂が、

「あなたはそんなに立派な方でいらつしやりながらどうしてさういふ生活をしていらつしやるのです。」

と訊ねますと、

「お話の出来ない事ですが、罪を天に犯しまして、それでかうして苦しんでゐます。」と、答へました。

「であなたの御宅はどちらです。」と訊きますと、

「いや陸にゐる時は家がなし、水にゐる時は舟もなく、朝は村を歩き、夜は野宿をするのです。」と、答へました。



樂も、もうそろそろ行かなければならなくなつたので、支度をしてその家を出ますと、その人は残り惜しさうについて來ました。そして樂が、これでいよいよお別れしませうといひますと、

「いや實は、あなたには近い中に大變な災難があります。私にあゝして御馳走して下さつた恩を忘れる事が出来ないのです、どうかしてお助けしたいと思ふのですが、」と云ひますので、樂も不思議に思つて一緒に行きなりました。

その晩宿屋にとまつてから、その人に御飯をすゝめますと、

「いやお志しは有難うございますが、私は年に五六回頂けば好いのですから。」といつて喰べません樂はます／＼不思議に思つて、その翌日また一緒に行きまして、ある川に出たので船に乗つて渡らうとすると、俄かに暴風が吹き出して、波が荒れて、樂の乗つてゐた船は覆つて、樂もその人も水底に沈んでしまひました。

しばらくして風がやむとその人は水底から樂を背負つて、波を踏んで出て來ましたが先に乗つてゐた船は壊れてしまつてゐるので、どこからか船を一艘探して來て、その中に樂を臥かしておきました。さうして今度は自分一人てまた川の中に潜り込んで、兩脇に樂の荷物を抱へて上つて來ました。かうして川底から三度も四度も荷物を運び上げて、漸く元の通りになると、自分も船に上つて來ました。樂は先きほどから氣がついてたゞ／＼不思議に呆れてゐましたが、その人が來ると兩手をついて、

「あなたは私の命を救つて下さつた。それだけでも澤山なのに、かうして荷物まで上げて下さつて、何とお禮の云ひやうもありません。」と云つて、その荷物を檢べて見ると失つてゐるものは殆んどありませんでした。そこでます／＼喜んで、これはきつと神様に違ひないと思ひました。

さて漸く船から上ると、その人はもう別れを告げると云ひ出しましたので、樂は笑ひながら、

「これほどの災難に逢つて、僅かに金の簪を一本失したばかりです。それなのにどうしてこのまゝお別れが出来るのですか。」といひますと「え、まだ簪が一本足りませんでしたか、それなら行つて取つて来ませう。」とその人は再び水中に行かうとしますので、樂はあわて、

「いえ、もう決して惜むのではありませんからどうぞゆくのには止めて下さい。」と止めましたが、その人は素早く水の中に飛び込んでしまひました。さうして間もなく笑ひながら、簪を持つて出て来て、

「あゝこれであなたの物はすつかり取り返す事が出来ました。」と樂の前に差し出しました。そこでまた別れようといひますのを、「どうか、私の家に来て下さい。」と無理に止めて、樂は自分の家につれて来ました。

その人は樂の家に来てからも決して毎日御飯を喰べません。漸く勤めて半月に一度位喰べるのですがその時はまたどの位たべるか判らないほど喰べるの

でした。その後少時すると、
「今日はいよいよお別れしなければならなくなりました。」と、またいひ出しましたので、
「そんな事をいはないで。」と樂はまた無理に止めるのでした。

その中にまだ晝間だつたのですが、空が暗くなつて、雷が鳴り始めました。樂はつい何心なく、「雲の上といふものは、どんな恰好をしてゐるものですか、雷なんてそれこそ何んな風な物だか、天上にでも行つて見たら判るのでせうが、かうしてゐては……」と云つて笑ひました。するとその人も笑ひながら、

「あなたは、天の上が見たいのですか。」と、いつてゐました。

しばらくすると、樂は急に眠くなつて来たので、寢臺の上に倒れると、前後も知らず寢込んでしまひました。その中にいつかまただん／＼眼が醒めかゝつて、氣がついて見ると、どうも寢臺の上に寝てゐる



るのと違つて、身體がぐら／＼揺れて、すん／＼高い所の上つて行くやうです。

樂は、はつと驚いて眼を開いて見ると、いつの間にか自分は雲の中に入つてゐて、自分の身の廻りは蜘蛛の巣のやうな白い雲に取り巻かれてゐるのでした。それです／＼驚いて立ち上らうとすると、舟に酔つたやうな氣がしてぐら／＼します。それでも漸く身を持ち堪へて上を仰いで見ると、目の前の碧

暗い空の中に、星がちか／＼と光つてゐます。はじめは、これはきつと夢に違ひないと思ひましたが、猶よく星が天上にちりばんでゐる恰好を見ると、丁度大きな蓮の實のやうになつてゐて、その中の大きいのは水甕位ありますし、中位のは瓶位、小さいのは掌へ入る位です。

そこで樂はその大きな奴をゆすつて見ましたが、それは少しも動かないが、小さいのはすぐに摘んで



「さあ、あなたも一杯やつて御覽なさい。」と水の器を渡しました。その年は丁度ひどい旱で樂の家の方でも困り抜いてゐた所だものですから、樂はすぐに雲の間から、故郷の方を望んでその水を傾け盡しました。

「それで結構です。」とその人はいつてから、「實は私にもと空の雷神だつたのです。けれども一度大王の命令もないのに、無暗に雨を降らした爲めに、三年の間、下界へ流しの罪を喰つたのです。それも丁度今日で終りになつた所です。あなたが天上を見たといはれるから、お連れ申しましたが、さあいよいよ御別れしなければならなくなりました。」と一本の繩の長いのを出して、

「さ、これにつかまつてお降りなさい。」と樂に渡しました。
樂は何だか恐ろしさうにおづくくと慄へてゐますと、その人は笑ひながら、
「大丈夫です。危い事なんかさせはしません。」

取る事が出来たので、そつと一つ袖の中へ藏ひ込んでしまひました。さうして雲をひらいて下の方を覗いて見ますと、海は銀のやうにかすんでゐるし、大きな城も豆位にしか見えないのでありました。
「こゝで一足踏み外したら、どんなことになるだらう。」と思ふと、身の毛がよ立つやうな氣がして急いで眼を閉つてしまつたのです。

するとそこへこんどは、二疋の龍が大きな車を引いて走つて來ました。車の上には澤山の壺があつてその中には水が一杯たまつてゐました。その周囲には數十人の人があつて、忙しさうに水を掬んで雲の間から降り灑いでゐました。樂が一人で茫然と立つてゐるのを見ると、

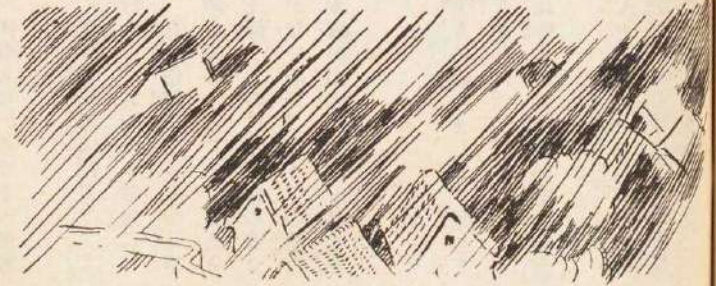
「あれは一體何者なのだらう。」とその人達は騒ぎ初めました。と、そこへ、樂のところにおたあの不思議な人が出て來て、
「いやこれは私の友達なのだから。」と、驚く人々をなだめて樂に向つて、

「いはいはれたので、樂も漸くいはれた通りにすると、ふはくと身體が浮いて間もなく地上に下りました。」

どこに下りたのかしらと四邊を見廻すと、自分のある村のはづれに立つてゐるのです。

それで、やつと安心して繩を放すと、繩はまたする／＼と雲の中に入つて見えなくなつてしまひました。

その時は早あげくの雨でしたが、樂のある村から十里ほど先の方は、ほんの一滴くらゐしか降ら



なかつたのに、樂の村だけには、田にも溝にも溢れるほどに降つてをりました。

さて樂は家に歸つてから、袖の中を探つて見るとさつき摘んで來た星がありました。

晝間見るとどす黒い色をしたたゞの石でありましたが、夜になると明るい光をびか／＼放つて室中を照すので、樂はこれを寶にして、平素は大切に藏つておき、珍らしいお客でもあると取り出して見せました。

その頃樂はもう三十にもなるのに、子供がなくなつて困つて居りましたが、或る晩樂の夫人がその星の光の所で、髪を解かしてゐますと、その星の光がだん／＼小さくなつて、しまひには螢位の大きさになつて、ひよこ／＼動き始めました。

夫人は大變驚いて見てゐる中に、その光はすうつと飛んで來ると夫人の口に入つてしまつて吐き出さうとしても、どうしても出ませんでした。夫人は驚いて樂の所へ行つてその事を話しますと、樂も大變

不思議がつてゐましたが、何事もないのでその儘寢てしまひました。

するとその晩、樂の夢に夏平子が現はれて、『私は死んでから天上に行つて、あの小さな星になつてゐた。さうして君が、私の遺族によくして下さる事をいつも喜んで忘れかねてゐたところ、こんど君が天上に來て私を携へて歸つたのはまだ縁の盡き

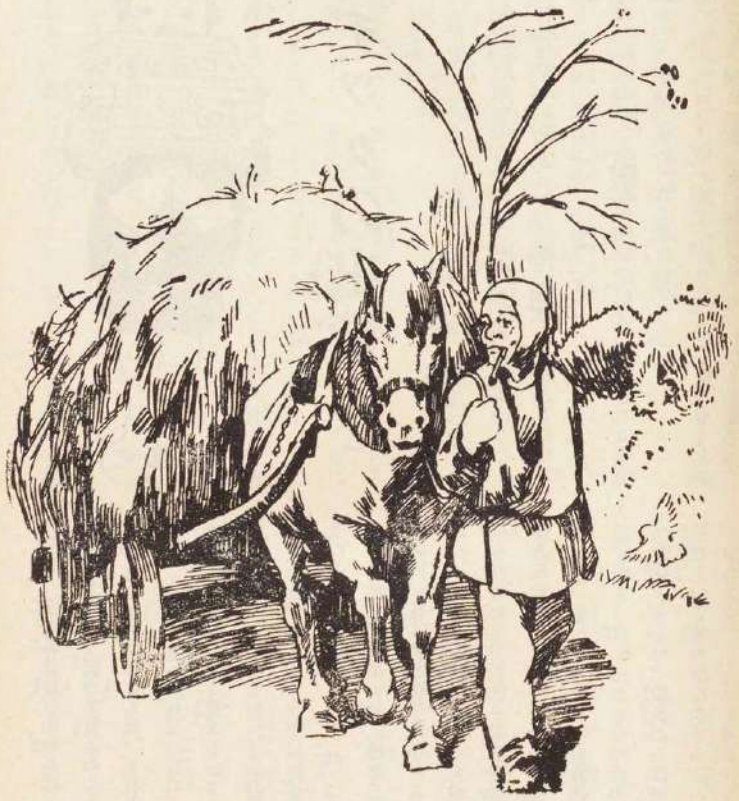
ないしるしだ。君に子供がないので、今までの恩に報ゆる爲めに君の嗣となる事が出來たのは、私も思返しが出來て嬉しい。』

と、いつて消えました。

樂は不思議に思つて、夫人に話しました。果して夫人はそれから身重となりました。

月滿ちてその子が生れた時には、光輝が室に満ちたと云ふ事です。

その子の名は星にちなんで『星兒』と名づけましたが、大きくなつて大變立派な人となつて、樂夫婦を大切にしたいといふ事でありませう。(たはり)



幼年詩 馬方 (推薦)

山梨縣北巨摩郡 多摩校尋四

清水 勝重

教室の

窓から見れば

馬方が

學校見ながら

馬を引いてく



ヂツクの出世 (つゞき)

山本 作次

ヂツクの主人、ファイツワレンの持船コンコルン丸が、こんどたくさんの荷物を積みこんで、長い航海に出ることになりました。

ファイツワレンはこの際、雇人たちにもひと儲させてやりたいと思つて、雇人どもを一間に集めて、

「お前たちのうちで、何か外國へ持つて行つて賣るやうな品があつたら、確でも船へ積むがい」と、いひました。

ファイツワレンの船は長い航海を終へて、大きな海のかなたのある國へ着きました。國の人々はまだ見たこともない船が着いたので、珍しがつてどん／＼集つて来ました。さうして我勝ちに船の積荷を買はうと言ひ出しました。けれども船長は誰よりも先に王様に會つて積荷を賣りたいと申し出しました。人々はさつそくそのことを王様にとりつぎました。

それからいく日もたゝないうちに、王様のお使が来て、「品物を御覽にいれよ」とのことでしたから、船長は急いで御殿へ参りました。

御殿では一ばん立派なお室へ通し、王様はお姫様と一しよにお出でになつて、海山の珍らしい御馳走を出して出来るだけ款待しました。と、どこからともなく數へきれないほど澤山な鼠が出て来て、また／＼くひみにたくさんな御馳走を喰ひつくしてはどつかへ姿を隠してしまひました。

王様は苦い顔をして黙つてゐました。

船長はすさまじい光景にたゞあきれてゐました。

「こんなに澤山の鼠がゐるではさぞお困りでございませう」「いかにもこの鼠には余も困りぬいてゐる。何と船長この鼠

四六

そこで皆は思ひ思ひの物を持つて来て積みました。ところがヂツクは何も賣つて貰ふやうなものがないので、臺所の隅で小さくなつてゐました。それを娘さんのアリスさんが見つけて、お父さんに訴へて、

「ヂツクは何も賣る物がないさうですから、私のお小遣で何か買つてやりませうか」といひました。

「それもいゝが、ヂツクにはヂツクの考があるだらうからそれを聞いて見よう」と仰つて、ヂツクを呼びました。

「ヂツクお前は何も船に積むやうな品はないか」

「はい、私は何も持つてをりません。が、たつた一つこないだ一ペニー(四錢)で買った猫があります」

「それはいい、ではその猫を船へつれて行け。どんな大儲けがあるか知れない」といつて主人は自分のことのやうに喜びました。ヂツクは日頃自分の食事まで割いて育てゐた猫ですから、大へんおしかつたのですが、しかたなしに船へつれて行きました。船員たちは變な物を持つて来たといふので皆でどつと笑ひました。

を退治するやうな工夫はないか。誰でもこの鼠を退治してくれた者には余の賣の半分を與へるといつてゐるが、いまだこの始末である」

「さやうでございませうか。……實は何でございませう。こんどこちらへ参ります時に、一匹の不思議な動物をつれて参りましたのですが、その動物がまた鼠を退治するのに驚くべき力を持つてゐるのでございませう」

「いや、それはぜひ見たいものだ。それが鼠を退治してくれるものなら、お禮はどのやうにでも……」と言ひも終らぬうちに王様は嬉しくて／＼黄い冠を床の上にお落しになつたくらゐです。

船長はヂツクから預かつた猫をつれてまた御殿へ参りました。御殿では一度船長を款待するつもりで、さつきのやうな御馳走を出しました。すると、また數へきれないほど澤山な鼠がやつて来ました。船長はこゝぞとばかり、抱いてゐた猫を室の中へ放しました。猫は電のやうに鼠の群にとびこんで、追つて／＼見る／＼うちに皆追つぱらつてしまひましたので、室の中は鼠のあとのやうにしんとしました。

四七

王様は大變な喜びやうでした。お妃様はびつくりして、この不思議な動物が自分の體にでもかみつきはしないかと思つてびく／＼してゐました。

船長が「ブツシイ／＼と呼びますと、猫は可愛くかけて来て船長の足をなめつりました。船長はさつそく抱き上げてお妃様に渡さうとしました。お妃様はまだなんだか恐さうにしてゐましたが、案外やさしさうな動物なので御自分の膝の上に乗せてみました。猫はうれしさうにぐ／＼喉をならしてゐました。そしてそのうちに眠つてしまひました。

王様は大喜びで、船の積荷をすつかり買ひこんで、それにまた十倍するほどの黄金で猫一匹を買ひとりました。船長も意外の大儲けにほく／＼して、翌日英國へ向け船を出しました。

ある朝、フィツワールンがいつものやうに事務をとつてゐますと、所有船コンコルン丸の船長が歸つて來ました。二人は坐につくとまつ、長い航海を無事に終へたことを祝福しあひました。それから、船長は例の大儲けの一伍十件を



ませんでした。それにそんなたいした物をどうしてもそのまゝ受取るこゝとができませんでしたから、主人に半分とつてくれといひましたが、主人はやつぱり、「これは私のとるべきものではありません」といつても取りませんでした。「それでは有益な事業にでもお使ひなさい」と主人はかさねて申しまし

くはしく話しました。なかでも猫の一件はフィツワールンがこの上もなく喜ばせました。そしてその猫のために拂はれた代價があまりに大きいので、傍に事務をとつてゐた三四人の人々は、こんな莫大な代價を残らずチツクのやうな小僧つ子にやるのはもつたないことだといひましたが、主人は顔をしかめて、

「猫の代價は猫の持主に與へるのがあたりまへぢやないか。どうして私が一文だつてとれるものか」といつて、早速チツクを呼びにやりました。

臺所で皿洗ひをしてゐたチツクは突然主人から呼ばれたので、もぢ／＼してゐましたが、何でもかでも來なけりやらないのだといはれて主人の室へ行きました。

「これはウィッチングトンさん、あなたの猫を賣つた代價として、只今船長がもつて歸つたものです。どうかこれをおうけとり下さい」といつて、主人は目も目映いやうな寶石の箱をチツクに渡しました。

チツクはいつになく主人からていねいな言葉でいはれて、からはれてゐるのではないかと思つてしばらくは言葉も出でた。

チツクはしかたなしにそれをいたゞいて、主人の室を下りました。

けれども、どうしても自分一人で持つてゐることができないものですから、奥さんや、お嬢さんにも、それ／＼分けました。

それから意地悪の女中にも分けてやりました。船長はじめ乗組員にもそれ／＼お禮をしました。

かうしてチツクの汚い顔は洗はれ、髪に縮らされ、衣服は流行のものに着換へられ、あつぱれロンドン街の大手をふつて歩けるやうな若者になりました。

それから五六年たつて、チツクはもとの主人のお嬢さんアリスさんをお嫁さんに貰ひました。

やがて、リチャード・ウキツチングトンの名は大商人としてロンドンの町々にひやくやうになりました。

それから三たびロンドンの市長になつて、國王ヘンリー五世陛下から勳爵士の稱號を與へられるやうになりました。

(なほり)

◆童謡 野口雨情選
林の鳥

神戸 二瓶けい子

林の中の
はじの木に
白い鳥が
とまつてた
なーんの 鳥だか
聞いてみよう

赤い畑

東京 鈴木壽湖

赤い畑に
家一つ
お化の出さうな
家一つ

母ない兒

茨城 森山さだを

雪がコン〜
降りますの
お山ぢや 狐が
啼きますの
お乳がほしくて
なきますの

鳥

東京 小野田露村

かしの かれ木で
からすがないた
田市ながめて
からすがないた
かなし かなしと
からすがないた

蝙蝠

神戸 藤尾甚治

かうもり かうもり
顔見せな
一べん 查出て



五〇

金魚になつた花子さん (推薦)

今岡伸

罐のお節句のすんだ明る日から、花子さんは身体を悪くして床に就きました。花子さんは熱が三十九度も昇つて、大へん苦しんでゐたのです。お母さんと姉さんは大そう心配して、お医者様の仰る通りに、氷で頭を冷しづめですが、それでも尙暑苦しいのか、花子さんは身体全體から、夕立に逢つた様に汗を流してウソ〜とうなるばかりでありました。

その花子さんの苦しんでゐる部屋の縁先に、眞赤な金魚を一匹入れた、圓い硝子瓶が置いてありました。花子さんは暑さと熱とに苦しみながら、その金魚が水中の中で溺しうに泳いでゐるのを羨やましうに絶えず眺めてゐました。そして「こんな暑苦しいのは厭だ。どうかして金魚になつて見たい。あの涼しい水の中で泳いで見たい。」と、思ひつめてゐました。

するとその金魚が不思議にも、口を水の上へ出して、「花子さんお苦しいですか、大そう暑がつてゐらつしやるやうですね。」と、話しかけました。

花子さんはこの親切さうな金魚の言葉に暫らく返事も出来ないでゐましたが、やがて、

「ほんたうに暑くて〜。でもあなたは、さぞ涼しいことでせう。私も金魚さんになりたいわ!!」

と、羨やましうに答へました。すると金魚は、

「それはわけはありませんわ、今すぐ代つてあげませう。」

と、言つて、水の中を三べんクル〜と、泳ぎ廻つたと思ふ間に、花子は金魚に金魚は花子に變つてしまひました。

金魚になつた花子は、大へん喜びました。涼しい水の中で冷たい水を口一ぱい飲みこんで、ピン〜として、瓶の中を上下に泳ぎ出しました。

五一

顔見せな

死んだ妹

東京 網野 まんまる

お人形のやうに
房ちやんは
二月ねれば七つなの
學校へあがるもぢきなのに
ののさんとこへ
行つちやつた

城址

土 穂 笹 生 頼

お城の址の 枯らがや
お漆の中の水綿
夕陽が真赤にさしたつけ

機織

群馬 青柳 花明

バタコン
わたしの母さん
機織よ
バタコン
バタコン
バタコン
バタコン

ボツボの家

京都 山本 四郎

お脊戸の お脊戸の
廣ッ堀に
ボツボのお家を
建てませうか
麥葉細工で
建てませうか

雨

廣島 牧野 眞砂子

向ふの山の てつべんに
眞黒雲が わき出して
雨が ザア／＼
降り出した

先が瓶にコッソと打ちあたります。それで此方でコッソ、彼方でコッソと打つて少しも思ふ様に泳げないので直きに「こんな狭い所は厭だ」と、小言をいひ始めました。

その内に、お腹がすいて来ましたが、水ばかりで食物は何も見當りません。幾ら待つても、誰も食物をくれるものもありません。たうとうお腹がすききつて、水の上へ口を出して、アブ／＼と水を吸ふのみでありました。

それは、何も知らないお母さんと姉さんが、花子に化けた金魚をほんたうの花子と思つて、一生懸命に看護してゐますから、金魚に餌をやるのをすつかり忘れてゐたからでありました。泳ぐことも出来ない位お腹のすききつた花子は、たうとう水の上へ横になつて、

「こんな狭苦しい所で不自由にくらすよりか、廣いお池が川へ出たいなあ。」と、思ひましたが、又

「こんな弱つた身體では、誰かにつれて行つてもらはなければ行かれない、ア、困つた。」

と、一人歌いてゐると、縁の端につるしてある籠の中のカナリヤが、よい聲で歌を歌ひ始めました。

空腹で身動きも出来なくなつた金魚の花子にも聞えませんでしたので硝子越しに見るとカナリヤは香氣さうに、頸を伸したり頭を傾けたりして歌つて居ますので、又

カナリヤの身の上が羨やましくなつて、

「カナリヤさん。」と、聲をかけました。

カナリヤは、その聲で歌ふことをハタと止めて、

「何か御用ですか。」と、問ひ返しました。

すると金魚は、

「あなたは氣樂ですネ、愉快さうに見えますよ。私に暫らくでもよろしいから、カナリヤにならして戴けませんか。」と頼みますと、カナリヤは、

「なぜ私の身の上になつたのですか。」と、問ひ返しました。

「なぜつて、一寸見てゐますと、あなたの香氣さうな歌を聞いては、不自由は少しもない様に見えますよ。私など、ろくに食物もないんですからネ。」と、申しますと、カナリヤは、

「私だつて同じことですよ。今は食物を戴いたばかりで、少しは元氣も出て来ましたが、水の切れて咽喉の乾いて歌へない時も、食物のなくて、餓しい時もあり勝ちですよ。時には、籠の外へ出て思ふ樹の枝へ止つて、思ひきり囀つて見たいとは思ひますが、もう長い間の不自由な生活で、羽根もすつかり弱りまして自由な世界へ出る力もなくなつてしまひました。」

金魚の花子は、カナリヤも自分と同じ様な、くらしをしてゐるのを聞きましてすつかり勢を落して、たゞボンヤリしてゐますと、カナリヤは尙も言葉をつ

逢ふた人

滋賀 緑川 緑

山の小道で逢ふた人
町へいつたら
また逢ふた

雨

東京 米田 延次郎

雨さん 雨さん
よう降るな
てるく坊さん
よんで来よう

四十雀

巖手 渡邊 恒彦

ビンカラビンの
四十雀
青い燕尾の服を着て
杖にとまつて遊んでる

山の鳥

京都 富田 孤村

しよんほり淋しい山鳥
お里の杜に何故往かぬ
一べん往つたら
日がくれた

かくれんぼ

神奈川 中川 純

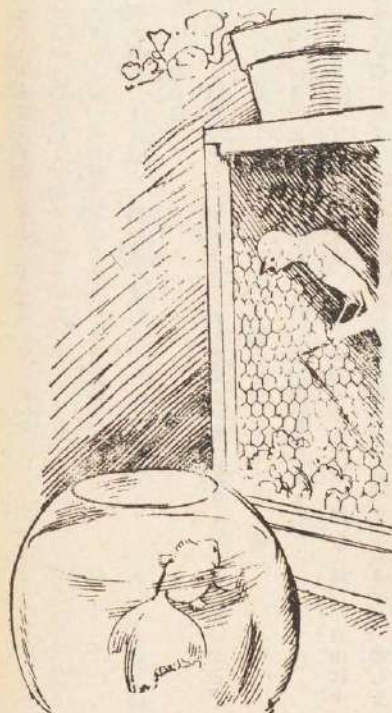
バア そら出た
イナイヨ
バア バア そら出た
イナイヨ

鴟

千葉 久保田 多香枝

枯木の鴟よ
寒かアないか
綿入半衣はどうしたね

自分で生きていけないものは、何時になつても不自由です。私も何とかして自由な處へ行きたいと考へてゐました。この籠へ来た當時は、籠を破つて出やうと思つて随分荒れ廻りましたが、人の入れた食味の食物を一口食べ、二口食べて見ても恥しいことには、たうとうこの不自由な暮しをする様になつたのです。今になつて悟つても駄目です。あなたも力のある内に、そんな小さい瓶より一時も早く跳び出して、廣いお池が大川へ行きなさい。そして自分の力で獲物を求めて生きな



さい。私の身のよなぞ羨んだつて同じことです。」と、言ひました。

ちつと聞いてゐた金魚の花子は、もうたまらなくなつて、カナリヤに自分も人間であつて、金魚に代つてもらつた次第を、話しあかしまして、

「これからどうすればよいでせう。」と、尋ねました。カナリヤは、

「まあ、あなたはもとは人間だつたのですか。而も一番自由な子供さんだつたのですか。それなら一時も早く、金魚に相談して元の子供におなりなさい。」

「でも、私は病氣で苦しんでるもの。」と、泣き聲で金魚は言ひました。

「幾ら病氣でも、お母さんや姉さんが、種々とあなたのいふ様に世話をしてくださるでせう。金魚でも、カナリヤでも、病氣は起る時もありますよ。然しそんな時でも誰も世話などしてくれません。私は一ヶ月程前に風邪を引いて、聲も出ないで苦しんでゐましたが、誰も世話をしてくれないのみか、怠けて歌はないのだと思はれて、お小言ばかり頂戴しましたよ。サア早くもとの自由な子供におなりなさい。」と、親切に言ひ聞かせられて、花子もその氣になり、花子になつてゐる眞實の金魚に、

「もしく、ほんたうの金魚さん、ほんたうの金魚さん、もしく。」

と幾ら聲をかけても、花子になつた金魚は、振向も致しません。もう仕方がありませんから、出る限りの大きい聲で、

お使ひ

岡山 松本幸明

寒い 晩に
お使ひにいつたら
足駄が ガチン
體が ガチン

泉

下總 菅沼桂村

木枯吹くから
家つくろ
明日になつたら
家つくろ

花火

岐阜 高島保治郎

金の星 ビカ〜
銀の星 ビカ〜
香戸の小敷に

雨の夜

長野 衣田進

ひよほん ひよほん
雨が降る
地蔵通りに雨が降る
夢のやうな 夢のヨナ
ひよほん〜と雨が降る

庭の柿

千葉 岡村龍二

果は僕にもがれ
葉は 風にとられ
庭の柿の木
はーだアか

宿なし鳥

筑前 谷口佐和

北風散は 食べられぬ
霜枯れ 藪間は 眠られぬ
二の岳 お山は 萎れます

「お母さん。」
と叫ぼうとしても、その聲が出ません。
「あ、困った、誰も聞いてくれない。こんな瓶の中で生きてても、不自由で死んだも同じことだ。」
と思ひながら、水の上で横になつて、「アップ、アップ」してゐますと、丁度その時、大雨が降つて来まして、お庭は一面池の様になりまして、水の乾き上つてゐた溝が小川をなして流れ出しました。これを見た金魚は、
「あ、今だ、今だ、このまゝ、此の中に居れば動いて居ても死んだのも同様だ。この瓶から跳びはねて、あの雨水の中へ跳び込まう。よし跳びはねる力が足らなくて、土の上へ落ちて水の中へ這入れなくても、死ぬだけだ。ただ、今死ぬか少し後で死ぬかだ。今は死ぬか、生きるかの境目だ。よし死なう、自分のあるだけの力を出して!!」
と、考へました。そして開けるだけの大きい口を開いて、一息水を呑み込んだと思ふ間もなく、全身に力をこめて、水の上で一跳ねやりました。
水煙をビシ〜と立て、一時に流れ出た濁水の中へ、「どぶん」と、落ちました。
そのとたんに、金魚の花子は、
「あ、嬉しい。」と、叫びました。そして、脚を思ふ存分振つて、大水の中を泳ぎ進まうとしますが、どうしたものが、身動きも出来ません。向もある限りの力を



出して動きますが、少しも進みません。よく〜氣をつけて見ますと、
「花子や、そんなに手や足を、振つては困るぢやないの、これ〜。」
と、云ふお母さんの聲がします。
よく見ると、お母さんは両手を、姉さんは兩足を、グツと握つて、押へてゐるのです。正氣づいて金魚を見ると、元氣無さうに泳いでゐました。大雨が降つたのが、庭の木の葉が、ボタ〜と落ちてゐて、雨上りの冷い風が、座敷を通りぬけました。カナリヤの啼々した囀りも聞えてゐました。(をほり)

(作者住所、奈良市笠置町。)

不^し思^し議^ぎな蘭^{らん}

西^{せい}條^{じょう}十八^{じゅうはち}



たうとうその怪しい蘭から大椿事がもちあがる日が来^きました。

或^{ある}る朝^{あさ}、遠山^{とんざん}さんはその小さい玻璃張^{はり}りの温室^{おんしつ}の

けしい香氣^{かいき}に驚^{おどろ}かされてゐました。

遠山^{とんざん}さんは大急^{たいきゅう}ぎで、謹^{きん}讓^{じやう}の廣^{ひろ}葉^{えつ}の鉢^{ひつ}の蔭^{かげ}にあるその可愛^{かわい}い、蘭^{らん}のところへ駆^{かけ}け寄^よ寄^よつて見^みました。

まあ、何^{なに}といふ美^み事^{こと}さでしたらう！垂^たれた緑^{りよく}い

ろの穂^ほには大^{おほ}きな花^{はな}が三^{さん}個^こまでも附^ついて咲^さいてゐました。そしてそれから洩^はれる香^かの高^{たか}いこと、言^いつたら！

遠山^{とんざん}さんはその前^{まへ}に立^たつて、たゞもう立^り派^ぱな花^{はな}の姿^{すがた}にぼんやりと見^みられてゐました。

三^{さん}つの花^{はな}の色^{いろ}は雪^{ゆき}のやうに真^ま白^{しろ}で、花^{はな}瓣^{はな}の上^{うへ}には金^{きん}茶^{ちや}いろの條^{じょう}がありま^ありました。妙^たな^たか^かち^ちを^をした紫^{むらさ}いろの、重^{おも}さうな唇^{くちびる}がとぐろを巻^まいてつき出^いてゐました。

遠山^{とんざん}さんはこの蘭^{らん}の花^{はな}がこれまで日^に本^{ぽん}の何^{なに}處^{どこ}でも見^み掛^かけられたことのない、ま^まつ^またく新^{あらた}しい種^{しゆ}類^{るい}のものであることを知^しりました。さうして嬉^{うれ}しさに思^{おも}はず聲^{こゑ}をあげようと思^{おも}いましたが、何^{なに}としてあま^あまり烈^いし^し過^あぎ^ぎる花^{はな}の香^か氣^きに、——それからなんとなく急^{きん}

扉^{かど}を開^あけると、蘭^{らん}の花^{はな}が愈^いよ^い々^々咲^さいたなと云^いふことを覺^きりました。と云^いふのは温室^{おんしつ}の中^{なか}全體^{ぜんたい}は何^{なに}とも言^いへない強^{つよ}い、いゝ香^か氣^きが漲^{あふ}つてゐたからです。ほかの花^{はな}々が發^はてる幽^{おと}かな匂^{にお}ひなどはみんなその一つのはに覺^き苦^くしくなつた四^よ週^{しゅう}の寒^{かん}氣^きに、おもはず、いゝと眼^{まなこ}が眩^{くら}みさうになりま^ありました。室^{むろ}の中^{なか}の花^{はな}々が一^{いっ}齊^{せき}にざはめきだし、眼^{まなこ}の前^{まへ}を泳^{およ}ぎだしたやうな氣^きがしました。

「ことによると温^ぬ度^どが違^{ちが}つてゐるかも知^しれない。」
遠山^{とんざん}さんがかう眩^{くら}いて寒^{かん}暖^{だん}計^{けい}の方^{かた}へ一^{いっ}足^{あし}踏^ふみだしました。すると俄^{たち}かに室^{むろ}の中^{なか}の物^{もの}が大地^{ちがひ}震^ゆのやうに揺^ゆれだして見^みえま^ありました。足^{あし}もとの床^{とこ}の煉^{ねん}瓦^わが上^う下^げに躍^{おど}りあがりました。續^ついて、真^ま白^{しろ}な蘭^{らん}の花^{はな}も、そのうしろの緑^{りよく}の葉^はも、それから温^ぬ室^{しつ}全體^{ぜんたい}も一^{いっ}緒^{じゆ}になつて一方^{いっぽう}へよろめき倒^たれ、また同時^{どうじ}に天^{てん}上^{じやう}へ飛^とびあがるかと想^{おも}はれました。

ばあや、朝^{あさ}御^ご飯^{はん}の仕^し度^どをして、遠山^{とんざん}さんが温^ぬ室^{しつ}から戻^{かへ}ってくるのを今^{いま}か〜と待^{まち}つてゐました。なかなか出て来^こないので、ばあやは朝^{あさ}の味^{あじ}噌^{そう}汁^{じゆ}をおろしたり、また温^ぬめなはしたり何^{なん}度^どもしてゐました。

「旦那さまはきつとまたあの氣味のわるい草にこびりついていらつしやるのだよ。」

とばあやばあは獨りごとを云つて、それからまた十五分ほど待ちました。けれども、それでもまだ遠山さんは出て来ません。ばあやはたうとうがまんがしきれなくなつて、迎へに出かけました。

一旦那さま、旦那さま。」

ばあやは温室の扉をあけてかう呼びました。けれども何の近事もありませんでした。ムツとする著いさが裡から發つて、それには氣がたちまちうつとりするやうな強い花の匂がこもつてゐました。一足踏み込んだばあやは、ちやうど湯の管の間の、床の上に何か黒いものが倒れてゐるのを見つけました。

ギョツとし、ばあやは一分間ほどそこにたちすくみました。

ご主人の遠山さんが仰向けになつて、あの怪しい蘭の花の下に倒れてゐました。さうしていつかばあやが、ちやうど小さい人の手のやうだと言つて氣味

わるがつた、先端のひらべつたい澤山の蘭の氣根が今は離れ、でなく、何本かづつ密着して、纏れた褐色の紐のやうになり、それがぐつと伸びて倒れてゐる遠山さんの腰や頸くびや兩方の手に蛇のやうにからみついてゐました。

驚きながらもばあやにはこの場の様子が一向合點が行きませんでした。しかし何心なくふと、透して見ると、ちやうど倒れた遠山さんの頬のところを吸ひついてゐるその怪しい氣根の先端からは、どうやらボタリボタリ赤黒い血の滴が垂れてゐるではありませんか！

「アッ！」と叫び聲をたて、ばあやは中へ躍り込みました。さうしてまづその蛇のやうな氣根を遠山さんの頬から拂ひのけました。それから更に手と頸くびとにからみついてゐるのも掻ぎ取りました。見るとその兩方の口からはやはりグラ／＼赤く絲のやうな筋をひいて血が流れてゐました。さうしてばあやは大急ぎで遠山さんの身體を抱き



起しにかゝりました。けれども、温室中に漲つてゐる何とも知れない烈しい花の香、この間にもばあやの眼に、鼻に、頭腦の底に、酔ひ仆すやうに強く迫つてきました。そしてその蛇のやうにのたうちまはる氣根たちの執念おかいこと！ 何度拂ひのけてもまた吸ひついでくるのでした。そのうちに、中の一

つは鑄首をもたげて今度はばあやの手くびへからみついで來ました。ばあやは生きてゐる心地もなくなりました。それに何分にも烈しい花の香氣で、あたりの景色がぼんやり夢のやうに見えて來ましたので、これは自分が氣絶しかけてゐるのだと氣がつき、矢庭に手近のところの扉をコヂ明けました。さうして遠山さんの身體を置きざりにして一べん戸外へ飛びだし、清々しい朝の空氣を力一杯吸ひ込みました。さうすると忽ち氣分が爽かになつて、新しい勇氣と智慧が湧いてきました。

ばあやはそこに在つた花の土鉢をとりあげて温室の玻璃によつて、大きな穴を明けました。さうして

「水を！ 早く水を！」

ばあやは狂氣のやうにどなりました。お爺さんは彈機にかけられたやうに飛んで行つて、直ぐさまコップに水を入れて持つてきました。ばあやはそれをハンケチに濕して、膝の上のせた遠山さんの顔から流れてゐる血を拭きとりました。

爽かな戸外の空氣が身に泌みたせいか、生氣を失つてゐた遠山さんはうすく眼をみひらいて、怪訝さうにあたりの様子を眺めました。また靜かに眼をつぶりました。

「さ、早く行つてお醫者を呼んで來るんだよ。」かう口早に云ひつけるばあやの眼には涙がたまつてゐました。

「どうしたつて云ふのだ？」

遠山さんはもう一べん眼を明いて、力の無い聲で

空氣の流通をよくして置いてからもう一べん裡へ飛込み、死んだやうになつてゐる遠山さんの身體をグイ／＼戸外へ引っぱり出しに掛りました。氣味の悪い蘭の氣根はこの間にもまた以前通り遠山さんの手足に吸ひついてゐましたので、引ばる拍子にその鉢は段から床へ落ちて粉々になりました。

怪しい氣根は、それでもまだ執念おかく纏ひついて離れませんでした。ばあやは眞赤になつてウンウン云ひながら、ちやうど膏藥でも刺がす時のやうに一つ／＼それを掻きとりながら、やつと遠山さんの身體を自由にして、戸外へ擲つて出しました。

戸外の朝の日光に當つたばあやの顔は恐ろしさで眞蒼になつてゐましたが、遠山さんの顔はそれ以上まるで死人のやうに白ちやけてしまつて、身體中に出來た十何個所の赤い斑點から血がさかんにふき出てゐました。

玻璃の碎けた音を聞いて、温室番のお爺さんは何事かと思つて駆けつけて來ました。さうして、遠山

かうばあやに訊ねました。

「旦那さまあなたは温室で氣絶なすつたのですよ。」

と、ばあやが優しく説明しました。

「そして、あの蘭はどうした。」

と、遠山さんが心配さうに訊きました。

「大丈夫でございます。ちやんとして居ります。」

と、ばあやが氣をはげますやうに答へました。

やがてお醫者が案内されてやつて來ました。

「妙ですな。別段お怪我も無いやうだが、ご主人は

何かで多量の出血をされて、それで一時は貧血なすつたのです。」

醫者は一寸容體を見てからかう言つて、とりあへずブランドイにうす紅い肉汁のやうなものを注せて遠山さんに飲ませました。さうしてしばらく安靜に臥てゐるやうに申しわたしました。

「一時間もたてば恢復されませう。別だんご心配なさるほどのことはありません。」

かう慰めて醫者は歸つて行きました。

遠山さんを二階の書齋に静かに臥かしたあとで、ばあやと温室番の爺さんとは伴れだつて温室の様子を見に行きました。

二人が恐々中をのぞくと、玻璃の破れ目や、開け放してあつた扉口から冷たい戸外の風がさん／＼吹き込んだので、先刻のあの強い、人を酔はすやうな花の匂は殆んど散つて無くなつてゐました。

床の煉瓦にはどす黒い血の痕が點々と落ちてゐてそこらにはあの怪しい蘭の氣根があちこちに裂れて飛び散つてゐました。花の莖は最前鉢が段から轉がり落ちた拍子に中ごろから折れて、白い花は凋れ、花瓣のふちが黄色になりかけてゐました。ばあやがそつと身を屈めて眺めると、その裂れた氣根のひとつが、ちやうど切れた蜥蜴の尾のやうに微かに蠢いてゐたので、そつとして覺えず後退りをしました。



その日の夕方ごろには遠山さんはすつかり元氣が恢復して、もとの通りの身體になりました。ばあやから一伍一伍の話が聴かされて、遠山さんは、初めて、アンダマン群島産のあの珍らしい蘭の花が、世にも怖ろしい魔力を持つた草であることを悟りました。この蘭はまづその花から何とも云へない強い烈しい香を發して人の神經を痺痺らせ、抵抗する力が無いやうにして置いてから、その怪しい手のやうな氣根をのばしてその身體に絡みつき、生血をのこらず吸ひとつてしまふのでした。マングローヴの沼池の中で水蛭に吸ひつかれて死んだとばかり想はれたあのパンツといふ可哀さうなアメリカ人は、實は何も知らずにこの花に近づいて、終に生命を奪られてしまつたのでした。

あまりの恐ろしさに、「ホウ」と太い嘆息をついた遠山さんは、早速傍の書棚から植物學の書物を出して、いろ／＼蘭について調べて見ました。さうしてその中にこんな事が書いてあるのを發見しました

それによると、元來蘭といふ花は蝶や蜂などの昆蟲が花粉の媒介をしてくれるので、次第にその仲間を殖してゆくものであるが、或る種類の蘭になるとどうして殖えてゆか一寸わからないものがある。たとへばシプリビディア属のものなどには、これを媒介する昆蟲も無く、中にはまるで種子を持つてゐないものさへある。かう云ふ種類のものは主として繖筒枝や球莖などの作用によつてその種屬を殖してゆくものと一般に解釋されてゐるが、さうだとして見ると、何のために美しい花がついてゐるのか一向理由がわからなくなる。——とにかく蘭の花についてはまだ人間の解き得ない不思議な秘密がたくさん潜んでゐるのである」とありました。

遠山さんはこれを読んで最前の經驗と思ひ合せ、まだ消えない恐ろしさに胸をふるはせながら、同時に蘭の研究に更に／＼深い興味を感じました(をはり)



夢の國

霜田史光

六六

「久子、来てごらん、面白い本があつたよ。」

「お父さんは大きな聲で土蔵の中から久子を呼びました。その時久子は椽側で日向ぼっこをしてゐるながら、三毛の眼の細くなつたのを面白がつて見てゐた所でしたが、お父さんの聲を聞いてどんな面白本なのか知ら、私の好きな繪本であつて呉れ、はい、わ、と思ひながら土蔵の中へ駆け込みました。見るとお父さんは土蔵の奥の古い長持を開けて種々なものを出し散らしてゐます。」

「お父さん、面白い本つてどれ？」

するとお父さんは眼鏡越しに久子を一寸見て、「これだよ。」と出ししました。見るとそれは大きな古ぼけた手にとるのも汚らしい本なので、久子は「何だ、つまらない本」と思ひました。でも、

「お父さん、それ繪本のこと？」と聞いて見ました。

「いや、さうぢやないよ、皆んな字だ。然しお父さんが今読んで見たら中に不思議なことが書いてあつたよ。」

「さう、どんなこと？」

「紙の葉を束の時へ敷いてその上へ置ればよい。」

お父さんはほんやりしてゐる久子の顔を覗いて、

「どうだ、久子、面白いことが書いてあるだらう。だからお父さんがお前を呼んだのだよ。だつてお前はこの本に書いてある通りの六月六日の午前六時に生れた子なんだからね。」

それを聞いて久子は飛び立つほど喜びました。

「まあ！ 私が！ ああ嬉しい、ぢやお父さんわたし夢の國へ行かれるのね。」

「ああさうだとも。」

さう云つてお父さんは急に笑ひ出してしまひました。それは何んとなく「そんな國はあるものか、この本に書いてあることは皆嘘だよ」と云つてゐるやうに久子には思はれたのでした。

それから幾日か経ちました。けれどもお父さんはその後には不思議な本のこととはちつとも申しません。久子のお父さんは理學博士ですから毎日むづかしいことを實驗室へ入つて調べてゐました。そして大學の先生なので學校へも毎日のやうにゆくのでした。

久子は少々気が引かれて來ました。するとその古ぼけた汚らしい本が、何んとなく魔法の書でもあるやうな気がし出したのです。

「お前讀めるか。」と云つてお父さんが出した本を恐々ながら手にとつて見ると、微臭い匂ひがグリーンと鼻をつきました。でも我慢して中を開いて見ましたが、久子が學校で習つた事もないやうなむづかしい音の假名で書いてありましたので、「讀めないわ、かういふ字は學校で教へないんですもの。」するとお父さんは笑ひながら久子の手から其本を取つて、不思議なことが書いてあると云ふ所を讀んで聞かせました。それを聞いて久子はどんなに珍らしく、そして不思議に思つたこととせう。その本にはざつとこんなことが書いてあつたのです。

「皆さん、夢の國のあるのを知つてゐますか。夢の國といふのは確にあるのです。けれども仲々ゆくことが出来ません。夢の國へゆくことの出来る人は十より少し年の子で、六月六日の午前六時に生れたものでなければなりません。そしてその子が夢の國へ行きたいと思ふなら六月六日の前の晩に、合

六七

久子は決して夢の國のことを忘れませんでした。どうも本當にあるやうに思はれてならないのです。それでお隣の俵屋の子のトミちやんと遊びながらそのお話をしては二人で面白がりました。二人は今にも夢の國へ行かれるやうに思つて、龍宮とどつちが立派でせうかとか、綺麗な女王様がいらつしやるでせうかとか、そんなことを話しては二人共喜んでゐました。トミちやんのお父さんはそれを聞いて大へん面白がつてゐました。トミちやんのお父さんは俵屋でしたから家も大層貧乏でありました。けれど久子は大好な叔父さんでした。さうしてゐるうちに月日が経つて待つてゐた六月六日が来ました。久子は俵屋の叔父さんに頼んで今歡の葉を澤山とつてきて貰ひました。そしてあの不思議な本に書いた通りにして寝みました。

あの古ぼけた不思議な本に書いてあつたことは嘘だつたでせうか。どうして、皆さん、それは本當だつたのです。これから久子がどんな風にして夢の國を見物して来たかをお話しいたしますせう。

二

をどうして讀つたらよいでせう。」
すると竹は云ひました。
「湖の岸へ立つて船のことをお考へなさい。考へると云つても形から大きさをすつかり船が出来上るやうに考へるのですよ。さうして考へることですつかり船が出来上りましたら



六九

久子は船とつかず飛行機とつかない何かに乗せられて矢のやうに走りまわりました。空を飛んでゐるのだから水の中をくぐつてゐるのだからさつぱりわかりません。ふと気が付いた時は大きな湖のそばに立つてゐました。見ると湖の形は柿の種子のやうでした。水は眞白でした。そして圓い形をした黒い島が眞中にあります。久子はどうもその島が夢の國のやうに思はれてなりません。どうかして行きたいものだと思つても船がありませんから行くことが出来ません。ふと見ると一方の岸に澤山の竹が生へてゐます。いや、竹だか何んだか實は久子にはよく解らなかつたのです。どうしてと云ふにその竹は今迄見たことのないやうな眞黒な色をしてゐたし、その上珍しいことには枝もなければ葉もないのです。その時久子は思はず、
「随分妙な竹ね。」と獨り言を言つてしまひました。するとその竹は口を利きました。
「久子さん、よくいらつしやいました。夢の國ではあなたの来るのを待つてゐます。」
「おや、黒竹さん、左様でございますか。けれどもこの湖、

一番お終ひに「船」とお云ひなさい。さうすればお終ひ、あなたのお考へになつた通りの船が出て來ます。」
久子はそれを聞いて随分不思議なことだと思ひました。そして岸へ立つて、どういふ船がい、かなと思ひました。そして遂々赤い小さな船がい、と思ひました。その船の周囲には

一杯花が飾つてあつて、黄金色をした帆が欲しいと思ひました。そして船の中には、鶴の羽で出来た椅子が真中に一つ欲しいと思ひました。もうこれでよいと思つたので、「船！」と云ひますと、成程不思議なことには、忽ち眼の前へ思つた通りの船が現はれたのです。久子は驚き、また喜びましてすぐその船へ乗りました。そして久子が鶴の羽で出来た椅子に腰をかけると、黄金色の帆には一杯に風が入つて赤い船はするすると動き出しました。

久子はあまりの不思議さにほんやりしてゐますと船は湖を渡るやうに横切つて真中の島に着きました。久子は岸へ上りましたが何んとなく島の様子は淋しさうです。久子は何気なしにあの邊に黄金のお城があればいと考へました。すると不思議なことには黄金のお城が島の真中に建つてゐるのが見え出しました。その時お城の中から大勢の女官が走り出して来て久子の手をとりました。

「まア久子さん、よくいらして下さいました。女王様はお待たせです。」

女官達はかう云つて久子をお城の中へ連れてゆきました。

時かう云ひました。
「此お部屋ではどこへでも遊びに行くことが出来ます。外國へ行つて見たいと思へばすぐ外國の街が鏡の中へ現はれて、あなたはすぐ歩く事も出来るし、電車に乗る事も出来ます。また船に乗つて海を走りたいと思へばすぐその通りになれます。それからもう一つ面白いことはあなたの赤ん坊の時と、大人になつた時とを見ることが出来ます。どうです、一つ映



久子は本當に夢に夢見る心地でついてゆきました。女王様始めお城の皆んなの人達は久子の来たことを大層喜びまして、澤山の御馳走をいたしました。

また、女王様は先に立つてお城の中を案内して見せて下さいました。先づ第一に「光の室」へ入りますと、眼が眩むほど立派です。その時女王様は笑ひながら久子に向つて

「私の方をよく見てゐてごらん下さい。」と云ひますので、久子は何気なしに美しい女王様を見つめてゐますと赤い光がぱつと差したかと思ふと、女王様の姿はふつと消えてなくなりました。おやと驚いて向も見てゐますと、今度は青い光がぱつと差したかと思ふと、一つの美しい蝶がひらりと飛び出しました。久子は一層驚きましたが、この蝶はきつと女王様に違ひないと思つたので、忽ちその思ひが通じたと見えて女王様は急にまた元の姿になりました。

久子は「光の室」は随分面白いと思ひましたが、それと同じに、何んでも思ふことがすぐ事實になつて現はれてくるので、うっかりしたことは思へないと、少々恐くなりました。女王様は今度「鏡の室」へ案内しました。女王様はその

して見ませうか。」

「いゝえ、もう澤山です。それより出来るなら私のお父さんを映して見せて下さい。」

久子は餘り不思議なこと許りなので少々恐くなりました。そしてお父さんやお母さんのことが心配になりましたのでかう云つたのです。すると女王様は、

「それは容易いことです。」と云つて一枚の鏡を開きますと、不思議にもお父さんの書齋が出て来ました。久子は忽ち鏡の中へ踏み込んで

「お父さん！」と云つて見ました。するとお父さんは大層怒つた顔で、

「久子！ お前は今迄何處へ行つてゐた。」と大きな聲で叱りつけました。

久子は慌て、鏡の中から飛び出しました。すると鏡の中のものも消えてしまいました。

久子は急に家へ歸りたくなりました。

「ねえ、女王様、わたし家へ歸りたくなりましたわ。」

と申しますと、女王様は大層な残り惜しがりでしたが、そ

れではと云ふので歸ることを許して呉れました。この夢の國では女王様でも、一度思つたことは止めることが出来ないのです。

そして女王様は久子にお土産として大きな蟲眼鏡のやうなものを下さいました。そしてかう云ひました。

「この眼鏡は、人間の本当の姿を見る眼鏡で、本當に心から偉い人は、この眼鏡には大きく映るのです。そして、偉い人にしてゐても、馬鹿な人とか悪い心の人とかは、小さく映るのです。」

これを聞いて久子はどんなに喜んだことせう。その時すぐ早く歸つて仲屋のトミちゃんと一緒にこの眼鏡で種々な人を見て歩かうと思ひました。第一にお父さん、それからお母さん、仲屋の叔父さん、叔母さん、それから種々な他の人：久子はもう早く歸りたくてなりませんでした。

やがて久子は元來た通りに赤い船へ乗つて湖を渡り切る岸に上りました。

それから後は何んだかもやもやとしてよく解らなくなつてしまひました。(フツク)

童 九官鳥 (推薦)

奈加島 佳代子

九官鳥が びつかと

見てゐます

赤い籠の 中から

見てゐます

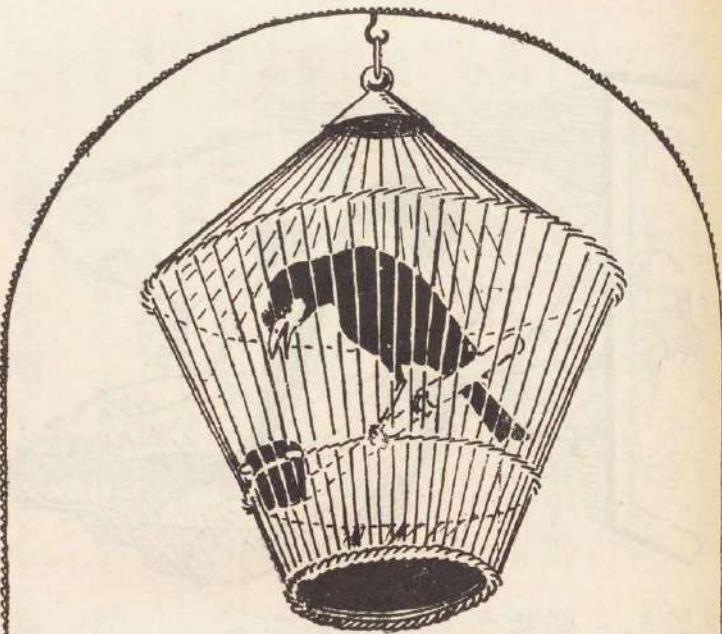
子供が通ると

見てゐます

どの唄 うたほと

見てゐます

(住所 東京浅草馬道八ノ一、平井方)



梅若丸物語

齋藤佐次郎



むかし、京都の北白河といふところに吉田の少将惟房といふお公卿様がゐりました。奥方の花御前と一しよに何不自由なく暮してゐましたが、たゞ一つ子供のない事を淋しく思つてゐました。

少将はその事を大そう苦にして、ある時、奥方と二人で京都の日枝神社へお詣りをしました。そして、その晩はお社へおこもりをして、どうぞ可愛い子供をお授け下さるようにお祈りをしましたが、明け方になつて、奥方がウト／＼としたかと思ふと、不思議な夢を見ました。

「美しい花園に梅の花が一ぱい朝日に照らされて咲いてゐました。奥方はその中にしよんほり立つておるでになりましたが、
「まア、歌でおいしそうな梅なんだらう。」と仰つて、それを

一つ／＼捲んで口へお入れになつたかと思ふと、夢が醒めたのでした。

それから間もなく奥方は身重になつて、玉のやうな男の子をお生みになりました。少将の喜びはどんなでしたらう。さつそく日枝神社へお禮のお便をたて、生れた子供には梅の花の夢を見て生れた子だといふので、「梅若丸」といふ名をつけました。

二

梅若丸は少将夫婦に可愛がられて、五歳の年まで何事もなぐすらくと育つて行きました。ところが、ある時、お父様の少将が、ふとした病がもとで重い病氣におなりになつたので、都中の名醫といふ名醫が来て、脈をとりましたが、病氣は重るばかりでした。たうとう醫者も見離すほどになりました。それで、この上は神様におすがりする外ないといつて、奥方は都中のありとあらゆる神様に祈願をこめました。五歳になつたばかりの梅若丸も、お母様と一しよにお詣りをして歩きました。

しかし、人の壽命ばかりは神様や佛様でもどうすることも

出来ませんでした。少将の命はたうとう今日か明日かといふほどになりました。

いよく／＼臨終が近いといふ時、少将は梅若丸を枕邊へよんで、遺品だといつて、一管の横笛を下さいましたが、それから間もなく、三十五歳で、この世を去つておしまひになりました。

三

月日はたつてしまふと早いものでした。北白河の屋敷に母様と二人で淋しく暮してゐた梅若丸が七歳になりました。もうこの時分には人並すぐれた賢い少年でした。

ある日のこと、梅若丸がお母様にいひますには、
「お父様は私になかつたので嘆いてゐらつしやいました、私は今お父様がゐないといつて嘆いてゐるのです。ほんとにこんな悲しい浮世にいつまでもゐるのはいやになりました。」
さういつてどうか比叡山に行かせて坊さんにして下さいと頼みました。

しかし、奥方は、「何をお前いふのですか。」と仰つて最初は氣にもとめませんでした。

「たつた一人のお前に行かれてしまつては、私はどうして暮
したらいいでせうね。」さういつて、お泣きになるやうな事も
ありました。

しかし、梅若丸がたつてといつてきかないので、たうとう
奥方もあきらめて、一つには學問の勉強にもなる事でしたか
ら、比叡山の月林寺といふお寺へ修業にやる事になりました。
月の美しい晩、梅若丸は中山の次郎といつて、古くから少
將に仕へてゐた一人の家來につれられて、比叡山を登つて行
きました。



四
月林寺に入つてから梅若丸は一心に學問を勉強しました。
どうかして偉い人になつて、お母さんに安心させたいと思つ
て勉強したのでした。その間も始終中山の次郎は、傍につい
ていろ／＼と世話をしてゐました。

梅若丸は朝は早くから起て大勢のお坊さん達にまちつて學
問をしました。それから夜になると、お父様からいただいた
横笛を出して吹くのを樂しみにしてゐました。お母様と別れ
て淋しく比叡山の山の中に暮してゐる梅若丸にはこれが何よ
りの樂みでした。

笛を吹くと、死んだお父様のことや、それから北白河に淋
しく暮してゐるお母様のことや、一しよに遊び暮したお友達
のことなどが思出されました。そして、思はず笛を置いて涙
を拭ふことが度々でした。

二年三年とまたたく間に過ぎて、また春が来て櫻が咲きま
した。梅若丸は十二歳になりました。もうこの時には大人も
及ばない位の學問を覺えてゐました。殊に歌を詠むことが上
手になつた梅若丸は、ある日のこと、外へ出て見ると、樂の



木の間には櫻がちらほらと咲いてゐて、其が丁度消え残つた春
の雪のやうに見えましたので、思はず歌を一首詠みました。

「立てこめて、かすむ木の間には咲く花は

消え残る春の雪かとぞ見る。」

さつそく家へ行つて坊さん達に歌を見せると、坊さん達

は驚いて、

「これは美事だ！」と口々にいつて、賞めました。

坊さん達は、平生自分達の可愛がつてゐる梅若丸が、こん
なに立派な歌を作つたのですから大變な自慢で、方々のお寺
へ行つては鼻を高くしてふれて歩きましたから、忽ちそれが
山中の評判になつてしまひました。

ところが、同じ比叡山の東門院といふお寺に、其處の坊さん
達が自慢にして可愛がつてゐる松若丸といふ少年がありまし
た。松若丸は年も梅若丸と同年で、氣量もよく、學問も大變
によく出来たので、いつも梅若丸と引合ひに出されてゐまし
たが、梅若丸が櫻の花の歌を詠んでからは山中その評判でも
ち切つて、誰一人松若丸のことをいふものがなくなつてしま
つたので、東門院の坊さん達は氣が氣でなく、

「松若丸、お前も一つ櫻の花の歌を詠みなさい。そして、梅若
丸を負かしてやるのだ。」といつて松若丸をせき立てました。

松若丸もきかぬ氣の少年でしたから、早速机に向つて切り
と工夫をこらした末、やうやくにして一首作りました。それ
は、

「かすむてふ峯の木の間に咲く花は
何れ雪かと紛ふものかは。」

といふ歌でありました。

梅若丸が櫻の花を消え残る春の雪にたとへたので、松若丸はそれをけなして峯の櫻を雪と間違へる馬鹿者があるものと詠んだのです。

東門院の坊さん達はこの歌にすつかり感心して、山中の寺へ行つて見せて歩きましたが、誰一人ほめるものがありました。

「松若丸の歌は理窟つほくて駄目だ。梅若丸のとは比べもつかない。」

さういつて、いよく梅若丸のことを賞めますので、東門院の坊さん達はすつかりしほけてしまつて、梅若丸のことは無論のこと、月林寺の坊さん達のことまで憎みはじめて、よると觸ると喧嘩をしかけました。そしてたうとつ、

「あゝいま／＼しい。これといふのも梅若丸があるからだ。あれさへないものにしてしまへばいいのだ」と、思込んでしまひました。



氣の荒い坊さん達の事ですから待てしませんがありません。忽ち「梅若丸を殺してしまへ」といふことになつて、月のない闇夜を選んで月林寺を不意打ちに攻めやうと相談をきめました。

(若き人は日本歴史を讀んで御存知でせうが、この頃の比叡山の坊さん達は亂暴者ばかりで、本當の坊さんらしい者は殆どなかつたのです。何か事があれば、すぐ太刀や長刃を抱へて飛出すのを仕事にしてゐました。)

さて、梅若丸を殺してしまはうと謀んだ東門院の坊さん達はいよくある晩、手に／＼松明をともして太刀や長刃を抱へてワァーと鯨波の聲をあけて月林寺の門前へ押かけたのです。

月林寺にも同じやうに氣の荒い坊さんが百人あまりもゐました。大事な梅若丸を殺しに來たといふのですから、どうして黙つて見てゐませう。坊さん達は大意きでめい／＼腹巻をつけたり太刀や長刃を持つて門を開けて出て行きました。

忽ち門前で物凄い斬合ひがはじまりました。中山の次郎もその中に入つて戦つてゐましたが、大事の梅若丸はどうして

ゐるだらうと思ふと、氣が氣でなく、おはてて奥へ
とんで行きました。

梅若丸は奥座敷でふるへてゐました。

「若様、早く逃げませう。かうしてゐては大變です。」

中山の次郎はかう叫んで、梅若丸を背負ひました。

そして、裏門から敵に氣つかれないように逃げ出したのです。

それから四五丁も駈けたでせうか。その時、春中の梅若丸が急に思出したやうに、

「おや、大事の横笛を忘れて來た。」と、いひました。

それは父様の少將から遺品にもらつた大事な横笛です。それから中山の次郎も當惑しました。

「若様、それでは私が戻つて取つて参りますから、あなたはお淋しいでせうがこゝに待つてゐらつしや

いまし。直きに一と走りで行つて参りますから。」

さういつて、中山の次郎は梅若丸を杉並木の蔭にかくして木の間がくれに戻つて行きました。

五

月林寺の境内まで押よせて来た東門院の坊さん達は、十分に支度も出来てゐることですから次第に勢を増して来ました。それに引代へて月林寺の坊さん達の方は不意打ちをされたので、一人減り二人減りしてたうとう二十人にも足りない有様になつてしまひました。しかも、その二十人でさへ大抵は傷を負つてゐました。

その時、東門院の坊さんの一人が戻つて来た中山の次郎を目ついたので、

「それ、あそこに中山の次郎がゐる。あれが梅若丸の居處を知つてゐるのだ。生捕つてしまはう。」と叫んだので忽ち十人ばかりの荒法師が次郎に向つて来ました。

中山の次郎はそこを脱れて奥へかけ込まうとしましたが、たうとう坊さん達のために圍まれてしまつたので、刃を抜いて夢中で防ぎました。三人の坊さんが忽ち斬られて其處へ倒れたので、残つた坊さん達はカッとなつて、一度に長刃を振上げて向つて来ました。

七人あまりの敵に攻められた中山の次郎はたまつたものではありません。一人の荒法師ががまかせに打下した長刃のた



な人影が見えました。梅若丸は驚いて駆け出しました。

雪がどん／＼降る中を梅若丸は谷傳ひに夢中で逃しました。

梅若丸は、一刻も早く北白河の母さんの家へ行かうと思つて一心に駆け出したのでした。

いくどか道端の石につまつて倒れました。手足は凍えたやうになつて物の感じもなくなつてしまひました。

めに肩先きを斬られて、ばつたり其處へ倒れてしまひました。

六

杉並木のかげにかくれてゐた梅若丸は、もう中山の次郎が戻つて来さうなものだと思つて、首を長くして坂道の向を見てゐました。しかし、待つても待つても、次郎は戻つて来ませんでした。空はすっかり曇つてしまつて、寒さがひしく／＼身にしみて来ます。

その時は、丁度二月の末でしたので、寒つたひに吹いて来る風は、身を切るやうに冷たく、雪さへちら／＼降つて来ました。

「次郎はどうしたのだらう。これまで待つて来ないので殺されてでもしまつたのかしら。」

さう思つて梅若丸が案じ顔に月林寺の方をながめてゐますと、その時、ワァツと一段と高いときの聲があがつて、空が赤くなつたかと思ふと、月林寺の家根から火を吹きはじめました。

「おや、火事だ！」

と梅若丸が驚いて見てゐる間に誰か此方へ追かけて来るやう

さて、夜明け頃、梅若丸がやうやくにして迎り着いた處は近江の天津の里でした。まだ朝はやいので、何處の家も眠つてゐました。

梅若丸は、そこが何んといふ處か、きく事も出来ないでしよんほり道端の雪の中に立つてゐました。(つづく)



詩年幼
選水牧山若

川 (賞)

山梨縣小淵 伊藤文子
深小學校

大雨降り
あともないとこに
川をこしらへ
草や木を
両方に押しわけて
流れてゐる
評、實に氣持のいゝ、雄大な歌です。讀んで胸がすつきりします。(牧水)

いまから (賞)

山梨縣北巨摩 八巻みよし
郡多麻校第三

さむくなる
あきになつたら
あはせきて
ふゆになつたら
ぬのこきる
きいろいきくや
あかいきくが
さいてゐる。
評、菊の花の咲き亂れた山里にふさはしい歌です。(牧水)

悲しい旅 (賞)

京都市下鴨宮 野口紫光
河町五十四

くるくるとレコードはまはる
細い道をただひとり
針はさびしくすすみ行く
悲しい調べをたてながら
針は悲しき顔をして
泣きく、悲しい道を行く
レコードの針の旅路は悲しがる。
評、ちやうどこの作者の年ころにある、悲しい心持でせう。いかにもすなほに聞かれます。(牧水)

綴方
編輯部選

嵐の夜 (賞)

埼玉郡志木町 並木 蝶
小學校第四

夕べは風がひどかつた。雨も風にまけないほどよく降つた。僕は夜中にふと目をさました。見ると電氣はきえてろふそくが一本さびしさうにともつてゐた。お母さんは「燦々しおきてゐてくれ。お母さんは一ね入りするから」とおつしやつて寝た。僕は本をよみながら外の風雨の音を聞いている。やがて雨がやんで風ばかりになつたので、そつと戸のすきまから戸外を見た。外はもうす明るくなつてゐた。すこしたつてから戸を明けるために起きて行つた。明けて見ると、となりのすだれが風のためにぱたんぱつと音をたてて戸にぶつかつてゐた。空をあふぐと、雲が南から北へ北へととんでゐた。僕はしばらくそらに見とれてゐた。しばらくしてはつと氣がついて、くし

お父さん (賞)

埼玉縣川越南 近藤 浩
小學校第五

お父さんとお母さん。
お母さんは「今マコト(弟の名)をねかしてつけてからおきる」とおつしやつてマコトにお乳をのましてゐるつしやつた。
お父さんは川越の警察署長であつた。丸々と太つて首が短かく、頭はいつも一分別にしてゐた。酒は飲まず、煙草もすはなかつたが、牛肉は大好きで毎日食べてゐた。本を読むのが大好きで「静かなところ」で本を讀ませてくれさへすれば、なんの御馳走もいらぬ」と度々言つた。平生職務に熱心であつた。明治四十三年、丁度僕が生れ年、大水があつて、あちらでは家を流され、こちらでは人が流されるといふので、お父さんは毎日巡査をつれて、雨の中をびしょぬれになつて助けに出。夜になつて歸つてくると、洋服から水がだらだらとたれてゐたさうである。そのためぜんそくといふ病氣にかかつてしまつた。いくら醫者にかかつても治らなく、寒くなると起り出してぜい

自由畫「となりのお嬢さん」(賞)
長野縣小縣郡鹽川村南方
柳澤とし



やみを一つした。まもなく戸の明けてな
いとなりでほんくとさせるをたたく音がした。僕はお母さんの所へ行つて「お

ぜいと苦しさうな息をした。
そのうら熊谷へてんにんすることになつた。熊谷へ行つてからなほく重くな



自由畫「兄さん」(賞)
長野縣長野小學校第一
栗田米三

デンシンバシラ
ナホスヒト

東京市外 長尾アキ子
東中野町

デンシンバシラ
ナホスヒト、
ソロ／＼アガツテ
セミノ
トマツタトコヲ
ナホシマス。

トウフヤ

トウフヤガクル、
アメガフル。

評、あなたはいつもおじやうすだ。このふ
たつともまことにおもしろい。(牧水)

すゞめ

不明 田中元治

私のたんほの
いねを
たべるな
すゞめ

評、かう云はれるといかに安でもうたべ

紅にこそまつた

福井縣大飯郡 坪内千代子
高濱校高二

チラ／＼と
葉が落ちる
紅にこそまつた
葉が落ちる。

評、きれいな／＼歌。(牧水)

千鳥

福井縣大飯郡 茂山義雄
濱小學校高二

海ぎはに
千鳥が十羽
チユ／＼と
鳴きながら
まつてゐた

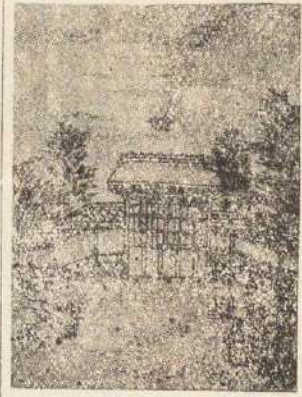
評、これもきれいだ、繪のやうだ。(牧水)

火

兵庫縣美濃 南野和郎
志染校尋四

あかい火
あをい火
たくさんまぢ

つて大がい床
に就てゐた。
それから一
ヶ月たつた
たないうちに
なくなつてし
まつた。その
時は大正六年
四月、どこの
櫻も満開で見
物人がたくさ
んあつた。僕
は一年生になつたばかりちやうどおしや
かさまの日であつた。おさう式は大そ
立派で、位は正七位でくんしようを二つ
もらつた。



「門」畫由自
五尋校學小富彌縣知愛
義春崎川

死ぬ一年前は大そう元氣で、もくぎよ
やはらがひを買つて、たたいたりふいた
りした。祖母さんは八十六までも長生し
たのに、お父さんは四十九歳でなくなつ
てしまつた。
今、家にはお父さんの大きな寫眞があ
るが、見るたびにお父さんがゐた時のこ
とを思ひ出す。

よつばらひ

神奈川縣小田原 安藤誠一
新玉一ノ一八二

今日はおけいこも早くおへたので、ひ
まが大そうあつたからお友だちの家へ遊
びに行つた。店を見るとまつかな顔を
して大きな聲をたてて話をしてゐる人や、
ぐでん／＼になつて酒をのんで居る人が
時々ゆかいさうに大きな聲を出して笑つ
てゐた。わいのやうな大きな口をあけて
ぐう／＼と、聲の上でねてゐる人もすみの方
にゐる。目の細くて口のそばがた／＼

る人がどこかでお酒をのんで来たと思
えてあつちへぶつかりこつちへぶつかり
よろ／＼よろめながら、やう／＼店の中
へ入つてきて「おッ母あ、酒を一ぱい
んろう」とさげんだ。
私はそれを見ると思はずぶつとふき出
してしまつた。足ははだして炭や土が指
の間へたくさん入つて居て親指の爪がは
がれてゐる。着物はかすりで、茶色のへ
こをびへすれきつたたばこ入れをさして
居る。そしてすぐ疊の上へどつかりとこ
しをかけて、ふるふる手のできたならしい
手ぬぐひを出
してあせをふ
いてゐた。

西洋手品

京都府中郡三
重小學校高二
澁谷光明

僕が、學校を
しまつてから
二三人の者と



「君東市」畫由自
五尋校學小東縣葉千
和村

うつくしや

群、ほんたうにうつくしい。(牧水)

月と私

群馬縣利根郡 西山 たに
薄根校六女

私は月でございませう

なぜあなたは晝出ない。

晝はかばかりが出るでせう。

だれがかばかりに出るのです。

おてんと様が出るでせう。

あせあなたは圓くて明るいのです。

それは私にもよくわかりません。

あなたの年は幾つです。

十三七つでございませう。

それでは二十でございませう。

え、さうでございませう。

どうしてあなたはとしとらない。

私に教へて下さいな。

私に教へて下さいな。

群、なか／＼面白い問答でした。そして歌

ばあさん

の調子も面白い。(牧水)

茨城縣眞壁郡 薄根校六女

章

私が六つの頃でした

私のはあさんもられて行つた

水戸の近くさ

もられて行つた

ばあさん取つて居つたから

いつたその年

すぐしんだ。

群、何でもなく歌はれてゐてなか／＼心持

の深い歌だと思ひます。(牧水)

すずめ

長野縣下伊那 關島 一郎
郡松尾校三

はたのなからばつと

まいでるすずめのむれ

にはかにふえる

すずめのむれ

だん／＼とほくに行くにつれ

むれはだん／＼くづれ行く。

群、秋か冬の景色でせうね、寂しい心地が

致します。(牧水)

雀

茨城縣眞壁郡 栗原 不二男
若柳校二

朝おきて

つて「御覽の通り此のひもには何の仕掛も御座りません、このひもを皆さんの着物の袖へかう云ふ風に……」とそのひもを僕等の袖口から袖口へ通して、兩はしをぎゆつと圓結びに結んでしまつた。かう云ふ風に結んで置きましたのを、私が掛聲一つで解いて御覽に入れます。小使は本當の手品師の様にしやべつてゐる。僕等はそんなことが出来るもんかなどと思つてゐると、小使は結目の所をしつかり握つて「ワン、ツー、スリー」とどなつて、いきなりひもを引つばつてぐんぐん歩き出した。おい無茶するな、それねえ引つばりや着物が破れてしまふはい」と僕等はやかましく云つたが、尙もぐんぐん引つばるので仕方なく歩いた。僕が「大方こんな事だらうと思つた」と云ふと、小使は「ワハハハ、ハ、ハ、ハ」と大聲で笑つて、今度は、僕等の頭と頭とをぐつん／＼かち合せた。

木炭わり

新潟縣大瀨郡 寺西 千代
高濱校高二

たので、鋸のうらでコタンとやると、ベチンと二つに割れて何も鋸で切らずに割ればよい様になつた。きり口はつる／＼してゐるし、いらぬ粉は立たず、よいことだらけだと思つてゐるまにすんだ。一筆啓上、火の用心、おせん泣かすな、馬肥せ、と云ひながら割れたすみを箱に入れて、又元の所へ入れに行つた。「一筆啓上……」と何度かくりかへした。のこぎりをかたづけて、手を洗つてしまふと、「あすんだ」とせのびをした。

ふれ

千葉縣安房 石井 きよ
郡健田高二

今朝の事であつた。私が本をつつんでゐると、隣の人が「才兵衛だんなく」と呼んだ。幸所に居たお祖父さんが「おい。と言ふと「あのね、まつりが新の十月十日に定つたて、願ふれだね——」と言つた。祖父さんは私に隣へふれて来るやうに言つた。すると、又前の人が「あのねーそれで其の日は農業止で、日の丸の旗を立ててひまちをやるんだてね——」と垣根

コットンと切れてしまつた。前へ出てゐる足に木炭のこがかつた。シャリ／＼いはず度、木炭の粉が顔のあたりまで舞ひ上つて、又足の上へ灰の様に下りて来る。時々切口がこまかくくだけて、粉は又其れ等を守るやうに上から／＼下りて来てたまる。上へふはり／＼上るのは一部で大部はまつすぐに土の上や木片の上へたまり落ちる。三つ目の木炭を割る時、鋸がギリ／＼と云つて動きにくくて大へんこまつた。中程で三つに割れて下におちた。次の一番大きいのを切るとき鋸が、ギリ／＼と音を立てて鋸をあてがつた所より二三分も手の方へちかよつたこれは大きかつたから大圓のなり、きずもつかずに心持よく割れた。其次から小さいのを切つた。小さいのは十度ほど鋸をうごかすと、すぐ切れてしまふのでらくである。小さいのを十ほど割ると、大きいのが又五つほど出て来た。もう後には鋸がうごかなくなつて、こまつて半分程から折る様にしてベチンと木炭を手で割つて居ると、もう細い小さいのになつ

荷車



自由畫「荷車」
福井縣大野郡高濱小学校

松本喜造

新道にほかんと
たつてゐると
雀がきんのきて
ないて居た。

評、田舎の冬の朝景色がよく歌つてありま
す。(秋水)

も ず

愛知県瀬戸 安井 英
小學校第五

もつがないた 朝ないた ばんないた
今日のひるは どこでないた
評、あなたゐない留守るときにないた。

(秋水)

電 燈

愛知県松山第一 松田 つとむ
小學校第六

電燈が消えた
まつくら闇の中で
赤ちやんが泣き出した。

評、あなたも少しわかつたでせう。(秋水)

ハ ト

新潟縣中蒲原 高塚 久彌
郡金津校第二

トブノガヨイカ
アルクノガヨイカ
ドチラガヨイナ

評、サア、わたくしにもよくわかりません
(秋水)

朝

東京芝罘字 川崎 春洋
田川町九

なつと、なつと、
と賣る壁に
フット目を覺したら
ボート鳴つたよ
工場が笛が。

評、その時あなたばあくびをしたでせう。
(秋水)

うちのとり

不明 關島 雪子

うちのとりは
しかたがない
いつでも
ねこのごはんを
たべにくる
評、まねけな猫ですわ。(秋水)

なつてゐる。其の隣の人は「あーい。」と
答へたかと思ふと、又其の隣へどなつて
ゐる。

其のうちにたうとうふれの聲も、聞え
なくなつた。ふと時計を見ると、もう七
時半であつた。

花電車

東京赤坂青南 服部 四郎
小學校第六

「まだ早過ぎるよ」とお母さんがいはれ
るのも聞かずに、夕飯がすむと隣の哲夫
さんとすぐに電車道にかけ出した。大人
も子供も年よりも皆待ちどほしさうに北
の方を見てゐる。

「おそいなあ……停電かしら」もうすぐ
来るよ」などと哲夫さんと言つて居た。
三十分ばかりたつとレールの兩側はぐつ
すりとなつた。あちらこちらの二
階の窓からもいつばい人が見て居る。巡
査は「今すこし後へ」と大きな聲でいつ
て居る。四十分ばかりたつと「やあ来た
来た」それ来た」と皆が一時にさわぎ出
した。坊や前へ出るとあぶないよ」「坊や
よく見えるかい」などとあちらでもこちら

らでもさわいで居る。
北の方が急に明るくなつた。

第一番めは神功皇后の人の形の電車であ
る。運轉手は美しい服を着てすましこん
である。二番目は世界強國の旗がついて
居る電車だ。どれもキラ／＼と目がさめ
る程美しい。哲夫さんは「僕はあの旗の
が一等好きだ」と言つた。最後の日本と
英國との國旗のが通ると後から普通車が
ついて行く。後には人人がいろ／＼な噂
をしながらプロ／＼歸つて行く。僕と哲
夫さんも花電車の噂をしながら歸つた。

病 氣

茨城縣眞壁郡 吉川 たみ
若柳校第五

私と春とてる子で、ばんざいおにを
やつていたら、そこさ醫者様がきました
ので、私はばけつに水をくんできておい
た。さうしてとうえん(お薬)にゐました。
そすと醫者様がねいさんの方さきまし
た。白いしやほん水みてな(みたないな)
と、くさ色つはいのとませてかなだらい
にあげました。ひかつてゐることがたなを
ひんだして、わたであいてだして、はじ

私はそれおつかなくなつたのであそび
にいってしまひました。

めはせいはいりみてなのをできものにと
うしました。
醫者様が「はりとほすのわかるかね」と
いひますと、ねいさんは「わかるよ、
とほすたびにわかるよ」といつた。醫者
様ははりを十文字にとほした。さうして
こがたなでズブリよこにきつてから又た
てにきりました。それがきりをはるとい
ふところで、ねいさんは「いでい」とう
ござだしました。
たまけてみんはねえさんをつかまへ
てゐました。たけちやんじのおつかちや
んは手をもつてゐた。
おつかちやんとおばさんと、とうちや
んはからだをもつてゐました。ほんたく
のあにさんはいしやさまのくすりゆすぎ
のかなだらひをもつてゐました。あとの
ていはみてゐました。私もとうえんにみ
てゐました。
そばにゐる春とてる子はへいきでみて
ゐました。
いしやさまの中ゆびと、人さしゆびと
をそのきつたところさ四方八方さ入れる
と、うみや、なまつちがいつばいでまし



自由畫「給日記」
東京麹町土手三番町一〇

關島 正人



通信

佳作の少い月

山本 鼎

△佳作の少い月だ。見つけ處に働きのあるものも、見方に熱心の見えるものも、描き方のいいものも實に少ない。△其なかで、柳澤とし子さんの寫生畫はなかなかうまく出来て居る。のんびりと物を感じて居る。蘇を云へば、女の子の眼などが對手の眼を描いたらしくもない事だ。雑誌の口繪などの眼を拜借して居るらしい事である。△松本喜道君のも無邪氣でいゝ。毛筆で、盡く描く事は賛成だ。△村和君の顔のデッサンはなかなか骨折つた畫だ。形もいゝし面などもとらへてあつて立體的な顔が表されて居るけれど、ちよときたなかにしくなつた。ちよまな顔色があちこちにしかのやうにのこつたからである。耳は右手で描く。

幼年詩 作つて見た
いと思ふ人たちへ

若山 牧水

眼の前に竹が六本、梅が一本あつて、梅には花が十ばかりも咲いてゐたとする。それを竹六本、梅一本、梅の花十ばかり、枝にあちこち咲いてゐると歌つてもいゝし、梅の花ちらほら今朝は随分寒いなア、お歌つてもいゝ。また、何だか僕がたべたいなアお菓子でもなし餅でもなし、さうだ、蜜柑だ、赤いお蜜柑たべたいなアなどと思ふやうな場合があるかも知れない。それならばすぐその縁に歌ふのだ。とにかく美しいと見たら見たやうに、た

だ。他の部分に對して形も調子もすつかり調子づつである。

△栗田米三君の「兄さん」といふ寫生はうまく出来ました。一年生のあなたとして上出来です。たしかに兄さんは歩き出して居ますよ。△川崎泰義君の畫はさして佳い出来とはいへないが、たぐさん聖海郡の學校のがあつたなかにこれがまづよかつた。

私が「ばつくり」といつたがなめか聖海郡のはどれもばつくり描いてある。併し少しまちがへられて居る。例へば、ばつくりといふ用意からであらうと察するが、何處も此處も、何でも彼でも、同じやうな太く濃い鉛筆の線で、とんと輝筆のやうに描寫された事だ。近い物と遠いものわけじめもなく、明るい物と暗いものとの別ちもなく、隣日なたの觀念もなく、すべて單純に太く濃い線を描いてある事だ。だから畫に一向奥行がなく、物が表れて居ない。一つ今度からは太く濃くなくといふ事は考へずに、見えた通りに寫生して見て下さい。

△岡島正人君の日記畫十枚のうち此畫がまづいゝ。他の畫はこぢややくして居て物が描けて居ない。日記の畫などは、器判紙へ毛筆で畫で描き水粉の具で色を施して見てはどうです。器判紙の毛筆は彩色畫はいゝのですよ。

べたいと感して居る。感して居るにすべつてありのままに寫すのがよいです。それを繪には寫がまづ似合ひさうだからと筆を持つて来た、たべたいなどといふのはお行儀がわるいからと我儘をしたりすると、自然筆を云ふことになつて歌に力がなくなりませう。

よくものを見てそれをありのままに寫生することゝ、感じたことゝも感じたと通りに歌ひ出すことゝを先づ勉強して御らん下さい。さうして行けばだん／＼自分ひとりです手になつてゆきます。

綴方選評

選者

こんどは二月分を一度に選んだのですから、いゝのが澤山あつて出しきれなくなつてこまつたほどです。寺西さんの「木炭わり」はあまり長かつたので始めの方をけづりました。それでいくらか味がなくなりましたが、やつぱりいゝものです。こまかに見てみるところがかんしんです。澁谷君の「西洋手品」はかなり達者な筆づかひです。石井さんの「ふれ」は短い文章で一寸の間の出来事をつかりとらへてゐるところがいゝのです。

新しく出た本

九〇

◆愛の歌 野口雨村先生著長篇童話集中山晋平先生曲、田舎の山奥で生れた一少女がその村に昔から傳つてあつた愛の歌と云ふ童話にロントを得て艱難辛苦の末に有名な音楽家となつた立志と教育とを基とした長篇童話です。家庭の教訓話として、小學校の教材として、父兄並に小學校の先生方へ他に一讀をお勧めいたします。(四六判英本箱入二百十八頁、定價一圓五十錢、送料八錢、東京小石川戸崎町創文社發行)

◆日本童話寶玉集(上巻) (浦山正雄先生著) 日本で出来た童話畫の中何が一番立派な本かといへば、誰でも富山房の繪筆家庭文庫であると答へますが、その第十篇としておなじみの浦山先生の作になつた「日本童話寶玉集」の上巻が出版になりました。第一節神話、第二節英雄傳説、第三節諸國物語の三つに分れてゐて、お話の数は實に八十八篇、驚く程のお骨折のものに出来上つたもので、日本の有名なお話は全部の中に入つて来りませう。先生の名筆によつてのお話も面白く書かれ「金の船」に掲載した日本神話も全部入つて来ります。各家庭に是非備へべき童話集としておすめいたします。(菊判六一八頁、定價三圓八十錢、東京神田區神保町富山房發行)

◆愛のゆくへ 人見東明先生著小曲集、明治の末から大正の初めへかけて日本の詩壇へ初めて詩壇を飾る詩人たの人は人見先生です。先生の詩は、少年が愛を思ふは少年が、青年が愛を思ふは青年が、夫々愛の思ふ姿をそれぞれにおきませぬ十年前に出された先生の詩集「夜の舞踏」は日本詩壇の寶玉です。本書は同書につぐ先生の傑作のみを年若き人のために集めた小曲集で、個々ある人にはこの上も無い慰安となりませう。裝幀は美しい岡澤葉氏の筆(定價九十錢、送料五錢、四六半裁形天金二百頁、東京神田區神保町富山房發行)

◆現代童話選集(井上康文氏編) この二年間に書かれた面白い童話を二十六篇、一人の作者から一篇宛お得意の作を選んで集めたのが此本です。えり抜きのお話だけにどれも面白く、裝幀も挿畫もきれいで定價が安く、近頃でのよい童話集です。現代の童話を知る上には一番便利な本としておすめいたします。(四六判三三〇頁、定價貳圓四錢送料十二錢、東京市外高田町雜司ヶ谷一步堂發行)

◆まき志。ぐろす。 (北原白秋氏譯) ながい間待ち望まれてゐた有名な西洋の童話集が北原白秋氏の譯で出ました。「母さんの寫鳥」と譯すと本の題がばつかりしませう。各家庭から喜ばれてゐる本ですから、日本の子供さん達からも歓迎されることとせう。(四六判二六〇頁、定價貳圓八十錢、東京市外高田町雜司ヶ谷一步堂發行)

◆童謡民謡詩の作り方 (福田正夫、井上康文兩氏著) 本書はわかり易いやうに童謡と民謡と詩との作り方を説いてあります。一貫例をあげて悉しい説明がついてあります。

松本せい子さんの「風の夜」はこれまでにない良いものでした。

また、「瀬」さんの「火たき」安田さんの「影ふみ鬼」吉田さんの「妹」早野さんの「弟の角力」などそれなりのものでした。

一體にちかごろの編方は長いので、雑誌に出すのにこまります。長いのもたいへんけつこうですが、雑誌に出すのはなるだけ短いをおよこし下さるやうに願ひます。

童話の選後に

野口 雨情

近頃皆さんの書く原稿がまろ／＼になつて来たから、ちよいとおこごとを云つてみませう。先づ日向ちみ子さんの原稿は短冊の様な細い紙きれへ書いてあつたこと、石田瑞穂さんの原稿は長い巻紙へ一つの字がおおよそ二寸位の大きで書いてあつたこと、森田貞夫さんの原稿は二尺大のゴ／＼した巻用紙へ薄く色鉛筆で書いてあつたこと、又、田嶋宗よし、福水俊、川瀬スズキ、木下露子、松尾太郎さん外十数人の方、どこにも原稿に住所が書いて

てなかつたこと、もつといけないのは作者の名前も住所もなかつたから、これでは選者も原稿の取扱ひに困るから、いやでもおこごとを云つてみたくなるのです。

三月號の募集童話

に就て

齋藤 佐次郎

▼今月集つた童話の数は驚くほどであつた。一通り讀むだけでもかなりの努力であつた。中にはなが／＼目をひいたものもあつた。今岡伸氏の「金魚の花子」小澤孝子さんの「いれむり姫」岡田文子さんの「二本のゴツラ」谷口佐和さんの「山脈越えて」藤田恭子さんの「どくばら物語」など殊に驚れてゐました。

前月号で「金の船」講演部の演説を絶賛しましたところ、非常な歓迎を受けてぞく／＼お申込みがありました。たゞ今のところ、講演の定つてゐる分を申込み順に發表いたしますと、凡そ左の通りです。

- 東京市外千駄ヶ谷 東京市民教會
 - 茨城県久慈郡久慈町 久慈小學校
 - 東京市麻布區仙臺坂上 安藤記念教會
- 尚、この外に未定の分が澤山にありますが、何れ次第で發表いたします。

金の船」童話講演部規定

- 「金の船」は大正十一年度新事業の第一歩として童話講演部を新設いたします。
- 講師は沖野若三郎先生です。
- 講演は先生のお仕事の都合上、毎月十五日から二十五日までの間に制限いたします。
- 先生の講演をお望みの方は、東京市外田端三五「金の船」編輯所へ宛て御申込み下さい。
- 講師に對しては、市内ならば車代、市外ならば往復旅費、宿泊を要する時は其宿泊料等を依頼者から御支辨下さい。

金の船の童話講演部

す。とりわけ民話と詩との作り方については讀んでゆくうちにひとりひとりに民話を書け時が作れるやうになります。初學の方は是非一本をお供へ下さい。(定価一圓二十錢、送料八錢、菊版半載形二百十九頁、東京神田表神保町大同館發行)

童話掲載外佳作

- △いれむり姫(小澤孝子)
- △山脈越えて(谷口佐和)
- △目白の兄弟(志村照子)
- △二本のゴツラ(岡田文子)
- △十三池(寺島西男)
- △紫色の小さな花(作間博)
- △どくばら物語(藤田恭子)
- △月光の夢(川崎綠生)
- △佐保姫と雨乞爺さん(笹木萬年青)
- △お山の石段(佐々木高明)
- △半ばな話(山田定平)
- △おせいと人形(伊藤温子)
- △牧童の夢(若林八重子)
- △馬鹿な狼(米田延次郎)
- △林檎の話(渡川長治)
- △水神様のお池(大車大要)
- △試し切り(千葉友子)
- △踊りの池(安田聖花)
- △大の王子(今井正)
- △年老つた小刀の話(木村進)
- △葡萄畑(井深清見)

童話掲載外佳作

- △い(こ)がた(愛媛坂上カネル)
 - △山梨(高橋十成)
 - △コスモス(千葉久保田幸夷)
 - △鳴らぬ笛(北海道山本正)
 - △雀のうた(兵庫丘木庄)
 - △どうぞお日様(東京佐伯紅花)
 - △捨れすゝき(岩手新地二郎)
 - △初雪(熊本緒方勝喜)
 - △北風(大阪小早川義雄)
 - △小人の母さん(大阪伊東勇太)
 - △赤い巻(岐阜松野準一)
 - △鐘(千葉徳信)
 - △赤い巻(小島高樹)
 - △伊勢物語(島田の父さん)
 - △人見辰市
 - △童話(島田)
- ▼幼年詩掲載外佳作
- △霜(茨城茂呂三郎)
 - △お乳(横濱堀田百代)
 - △ら(茨城若木銀一)
 - △お月様(米澤山岸孝二)
 - △夕顔(横濱田中喜一郎)
 - △しも(長野後藤平三)
 - △たんぼ(千葉小安三平)
 - △風(山梨三井みどり)
 - △猫ノアケビ(東京小田アキラ)
 - △つぼめ(愛知伊藤園雄)
 - △晩の火車(長野宮崎通郎)
 - △金の船(茨城植田武夫)
 - △グリスマス(兵庫伊藤マズ)
 - △水すまし(茨城坂巻やす子)
 - △赤とんぼ(東京椎名雨風)
 - △巻やすみ(横濱清水利造)
 - △納豆賣(東京藤田隆)
 - △伊香(東京上村啓)
 - △郵便屋(愛知堀浦和夫)
 - △響(群馬半口きね)
 - △四十から(東京岡添梅子)
 - △病氣(栃木鮎瀬健一)
 - △地獄(埼玉鈴木精一)
 - △でん／＼むし(大阪中道光二郎)
 - △お祭の晩(山梨太田清)
 - △お日様(大阪松江英之介)
- ▼綴方掲載外佳作
- △風の夜(福井松本せい)
 - △瀬(美吉田のぶ)
 - △火たき(福井一ノ瀬キク)
 - △六つ女の子(不明廣瀬俊男)
 - △影ふみ鬼(千葉安田紫子)
 - △お母さんのお土産(群馬高橋たく)
 - △今日の



記者より

鴉の手帖

▽毎日日々水のやうな風が編輯室の外を吹き...
△本誌一先生得意の作「金の船物語」第一...

△お月さん「第三輯に「玉子の馬」を出すこと...
△お月さん「十五夜お月さん」は昨暮御前...

につき(名古屋 吉本辨治) △たかちやん...
△かすみ(秋田 真山フミ) △ゆふへの事...



りよだ者讀

△持つて〜待ちとぼして来た「金の船」が...
△大興差出がましいことを申上げるやうです...

△お月さん「十五夜お月さん」は昨暮御前...
△お月さん「十五夜お月さん」は昨暮御前...

△お月さん「十五夜お月さん」は昨暮御前...
△お月さん「十五夜お月さん」は昨暮御前...

將にシズー來る

諸君の爲代理部の開設

好評噴々たる

シリドシマ



定價表
CBA
號號號
二十九圓五十八錢
其他五十四圓

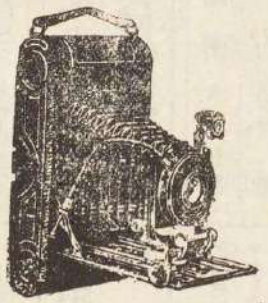
賞讚の的となれる

シリオキアヴ



定價表
參貳壹
號號號
二十九圓五十八錢
其他七十五圓

素人向きのカメラ



定價表
十二圓
十八圓
廿二圓
廿六圓
三十二圓
三十三圓
七十五圓

御問合せは必ず往復葉書か返信料添の事。御注文は住所を分りよく書く事。御注文は總て前金の事、剩餘の節は返金す。拂込みは成るべく振替口座に拂込むこと。

電話九段貳千七百五十貳番
振替口座東京參〇五七貳番

型録入用の方は貳錢切手二枚要す

(一の付後金)

懸賞創作募集

自由少年少女の創作
山本 鼎先生選
若山 牧水先生選
編輯部選

注意 課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君の好きなものを諸君の好きなふうになし、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とともにおとさないようにしてください。用紙は自由な紙はなるだけ用紙に、幼年時や親方はなるだけ原稿用紙(または半紙)にかいてください。よく出来た方には「金の船」特製の賞品を差上げます。次號締切は二月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は三月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地「金の船」編輯所。

童童 齋藤佐次郎先生選
野口雨情先生選

注意 童話は二十字詰二百行以内、童謡は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして、入選の場合は「金の船」賞を呈します。締切發表宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。

一般讀者の創作

定價表
壹冊參拾錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
壹ヶ年分十二冊(送料共)參圓六拾錢
但し新年號四月號九月號は特別號で廿五錢です。御注文の節はこの號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお拂込み下さい。
振替口座東京參〇五七貳番

送) 御注文は必ず前金で御拂込み下さい。金 送金は振替が一番便利で御座います。の 切手代用は(壹錢切手)一割増して下さい。注) 第何巻第何號よりと書いてください。(注) 住所姓名は必ず書き添えてください。

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年二月六日印刷(毎月一回)
大正十一年三月一日發行(一日發行)

編輯人 齋藤佐次郎
發行所 東京市外田端三百五十一番地
印刷所 東京市外田端三百五十一番地
印刷人 齋藤佐次郎
印刷所 東京市外田端三百五十一番地

東京市麴町區飯田町六丁目廿五番
發行所 キンノツノ社
電話九段二七五二番
東京市外田端三百五十一番地
編輯部 「金の船」編輯所
電話小石川五三八七

83 版複製出版る

◁容内の號月三界世女少きべす愛▷

少女界

尊き命の泉なる少女詩にはやよひ（ひまわつ） おもかげ（美智子）
小窓のあかり（佐伯綾子）

（物 讀 る な 重）

小説かざりピン 花園ゆう子
小説名もなき花 最上愛雄
小説淡雪降る夜 大江夕月
小説一絃琴のひびき 横山美智子

▼やよひの夕ぐれ……
▼かくや姫……
▼消えし白のシヨール……
▼まごころ……
▼チューリップの蕾……

馬場孤蝶先生の少女童話男の姿をかりては益佳境に入る……

（物 讀 る な 重）

冒險暗室の秘密 水上孤島
少女裸の奥方 長尾 豊
童話不思議なお禮 廣田花崖
少女講談めぐりあひ 溝口櫻村

▼地震、雷、火事……
▼かもめさん……
▼少女の印象……
▼童話研究家……
▼紺三郎申す……

美しく魅力に富む 表紙及口繪は カートンの姿（時彦）
おないとし（香柳）

— 七 五 三 二 一 —

海には二十三十の小舟が浮んでゐて、静に濱の方へ漕いで来たが、其中に美しい色の舟は見えませんでした。
「牛若丸のお舟は来ないネ。」と明次は悲しそうに言ひました。



行方づね

夕日が西の山に沈んで、海の面が美しく照り映えてゐる頃、伊吹子と明次は、海岸の松の樹の所へ行つて海の方を眺めてゐました。

定價 壹圓 送料 共一圓
三冊 十圓
十冊 三十圓
送分 十錢
東京 麴町
發行所 株式會社 角田
振替 東京 〇五七二番
電話 九二七二番

（この付後）金

「お父さまは、ずつと遠い、岬の彼方へ行つたの。だから、もう少し此所で待ちませう。」

伊吹子はさう言ひながら、明次と二人で手を取合つて水際の方へ歩いて行きました。その時丁度そこへ舟を着けた作爺さんは、二人の方を見ながら、

「おう、伊吹子、明坊！ お父さんを迎へに来たか、お父さんはナ、今にウソと鯖を釣つて来るぞ。今日は私も大漁だったよ。」と云つて生簀の中から大きな鯖を掬ひ出して、籠に入れました。鯖は銀のやうに白い鱗を光らせながらびちびちと澄ねました。作爺さんは舟を濱へ引揚げて置いて、

「左様なら、伊吹ちゃん！ 明坊！ 今に美しい牛若丸のお舟が来るからなア待つてゐろよ。此所で。」と云つて松林の方へ上つて行きました。けれども三十分四十分と待つてゐるうちに、後へへ来る舟も来る舟も、皆なそれは他所の

舟ばかりでした。

「遅いネ、お父さまは、」と云つた伊吹子は沖の方を眺めてゐたが、明治は頻りに小石を拾つては海に投げてゐました。

「伊吹ちゃん、もうお歸りよ……」と松の所から呼んだのは、おツ母さんの式江の聲でした。

「はアーい」と云つて、伊吹子は明次を引張るやうにして丘の方へ行つてみますと最うおツ母さんは杉の生垣の所を右へ曲つてゐる所でした。二人は丘の上から、もう一度海の方を見ましたが、矢張り美しいお舟は見えませんでした。家へ歸つて見ると、おツ母さんは、最うお夕飯の支度をして、風呂場の入口に屈んで、ごん／＼とお風呂の火を燃してゐました。

「お母アさま、もう御飯？」

明次は、おッ母さんの帯の所に凭れかゝるやうにして言ひました。
「今日はネ、お父さまが、あの新しい美しいお舟に乗つて、仕事始めをなすつたのですから、お歸りになるまで待ちませう。そして御一緒に戴きませうネ。」
起上つたおッ母さんは、明次の頭を撫でながら優しく言ひました。
「お母アさま、今ネ、作爺さんは大きな鯖を二十尾ばかり釣つて歸つたのよ。」
伊吹子は仰山らしく両手の人さし指で、鯖の長さを示しながら言ひました。
「さう？ では、お父さまも、澤山々々釣つて來ますよ。もう今頃は濱の所へ來てゐるかも知れません。」
おッ母さんは、伊吹子と明次の手を引きながら家の表の方へ出て來たが、もうその時は、往來の人の顔が誰だか見分けにくい頃でした。
「行つて見ませう。ね、お母アさま、濱まで行つて見ませう！」

伊吹子は、おッ母さんの袖を引張りながら言ひました。
「行かう、ね、お父さまを迎へに行かう。」と明次も強請るやうに言ひました。
「ではネ、お風呂の火を見て置かなさやア危いから……」
おッ母さんは風呂場の所へ行つて燃えさしの薪を直して置いて、それから二人を伴つて濱邊へ出て行きました。薄暗い海の上には二三艘の舟が岸の方目がけて漕寄せてゐました。ぎい、ぎいと櫓を漕ぐ音が淋しく聞えました。
「お父うさま……」と、明次は大きな聲で呼びました。けれども舟の中からは何の返事もありませんでした。その筈です。岸へ着いた舟から出て來た人達は皆な十八九の若い人達ばかりでした。
「勘五さん！」と明治は五六間向うの白い砂の上に立つてゐる男に呼びかけました。

「明坊か、お父さんを待てるんかい？」と言ひながら勘五は近寄つて来ました。「お父さまを迎へに来たんだが、遅いネ、うちのお父さまは。」

明次は仄暗い夕闇の中を差覗くやうにして言ひました。

「商造さんの美しい繪を描いた舟はネ、あの岬の向うに繫いであつたよ。今日は鮒がよく釣れるから、うんと釣つて歸るつもりだらう。もう直ぐ歸るに違ひない……」

勘五はさう言つて、直ぐ自分の舟の方へ歸つて行つたが、滴の垂れる大きな籠を片手に提げて元氣よく丘の方へ歩いて行きました。籠の中ではべち／＼とお魚の激ねる音がしてゐました。もう舟は一艘も海の上に見えなくなりました。「どうしたのだらうネ？」とおッ母さんの式江も心配さうに言ひました。

「お父うさま……」

と明次は大きな聲で呼びました。けれども海の上には、いつまで待つても舟の形が見えないので、たうとう三人は、其のまゝ家の方へ歸つて行きました。「お母アさま、もう御飯にませうよ。お腹が空いて来たんだもの……」

明次は泣聲を出して、おッ母さんの袖に縋りました。

「それではネ、伊吹ちゃんと明ちゃん、先きにお風呂へおはいり、其のうちに、お父さまもお歸りでせうから。」

おッ母さんは、さう云つて二人をお風呂に浴れました。

「お母アさま、お父さまが歸つて来たなら、直ぐ此所へお魚を持って来て、見せて下さいよ。お母アさまが先きに見ちやア嫌よ！」

明次はそんな事を言ひながら、風呂の中で、伊吹子と一緒に調子を合せて、日曜學校で習つた唱歌を歌つてゐました。

其時、表の方で人の話聲が聞えたので、伊吹子は明次を制するやうにして、
「ちよいとく、明ちゃん、お父さまが歸つたよ。」と云ひました。
「え、お父さまが？」と言つた明次は、直ぐ風呂場の月口の所へ出て行つて、
「お父さま……」と呼びました。
「お父さまはマダよ。」と云つたおツ母さんの聲に續いて、
「明ちゃん、お風呂？」と優しい聲で言つたのは熊田先生でした。
「あア、先生か。」と言つた明次は、周章て又たお風呂の中に浴りました。
「さア、出ていらつしやい。あんまりながく浴つてゐると毒ですよ。」
おツ母さんが戸口の所へ顔を差入れて言つたので伊吹子と明次は温順しく其
の言葉に順つてお風呂を上りました。二人が着物を着換えて、表の縁側へ出て
来た時、おツ母さんと熊田先生は庭に對ひ合つて立つてゐました。

「どうしたんでせう？ もう歸りさうなものです……」
それは心配さうなおツ母さんの聲でした。
「舟は新しいし、鮎は面白い程釣れるし、夢中になつて、お家へ歸るのを忘れ
たんでせうよ。」と、熊田先生は笑ひながらさう言ひました。
「お母アさん、御飯にませうよ。」
明次は又た強請るやうに言ひました。
「ねえ、もう御飯に致ませう。」
おツ母さんは縁側の方へ歩いて來ました。
「僕は濱へ行つてお父さまを迎へて來てあげます。その代りお魚は半分僕が頂
戴しますよ。」
熊田先生は笑ひながら表の方へ出て行つたが、三人は種んな話をしながら御

飯を食べてみました。丁度御飯のすんだ時、隣の作爺さんが尋ねて来て、
「商造さんはマダ歸りませんか。」と言つて軒下に立つてゐました。口に銜へて
ゐる煙管の端で小さい紅い火が光つてゐました。

「マダ歸らないの、どうしたんでせう?。」

伊吹子は縁側に出て行つて、稍心配らしく言ひました。

「ねエ、もう歸りさうなもんぢや。」

作爺さんは掌の上で、煙管をボンとたいたので、煙草の火が庭の上へ落ちて、
風に吹かれながらころ／＼と垣根の所へ轉がつて行きました。

「爺さん、一緒に濱へ行つて下さい。熊田先生も行つてるんですから。」

伊吹子は入口の所から顔を出しながらさう言ひました。

「僕も……。」と云つて明次は縁側から庭の方へ跳び降りました。

三人が門の所を外へ出た時は、もう真暗闇で、乾いた道の上が、微かに仄白く
見えました。けれども勝手を知つた道でしたから、三人は石にも躰かないで
濱の丘の所まで出ました。

「熊田先生……。」と明次が呼びますと、一町ばかり向うの方で、

「おうーい。」と返事をしたのは、確かに熊田先生だと思つたので、二人はその
方へ歩いて行きました。

所が其所に立つてゐたのは、熊田先生ではなくて、時々伊吹子の家へ遊びに
来る時也さんといふ若い漁夫でした。

「時也さんか、今頃何しに?。」と作爺さんは問ひました。

「舟の中へ忘れものをしたので。」と答へた時也は、「あなた方は何しに?。」とあ
べこべに尋ねました。

「伊吹ちゃん所の、商造さんが、今日鯖釣りに行つたまゝ、まだ歸らないんぢやよ。どうしたんだらう？」

作爺さんは時也の側へ近寄りながら言ひました。すると時也は、

「あ、商造さんか、俺ア今日商造さんに、あの岬の向うで出會つたよ。其時少しお腹が痛いちうて、巖の上で憩んでゐた。」と云つて、心配さうに伊吹子の方を透して見ました。

「さうか、それぢやア、お腹が大變痛み出したのぢやなからうか。」
作爺さんがさう言つた時、十四五間向うの方から、

「おうーい。」と呼んだのは熊田先生でした。

「先生だ。熊田先生だ！」明次は直ぐ聲の方へ走つて行きました。

「明ちゃんか、お父さまは？」

「まだ歸らないの、今ネ、時也さんに聞いたら、お父さまは、あの岬の所の巖の上でお腹が痛むつて憩んでゐたさうだよ。」

「えッ？ それは大變だ。」と、熊田先生は作爺さんの所へ走つて来て、

「ではお爺さん、これから舟を出して迎へに行つて、上げようぢやありませんか。」と云つたので、作爺さんも時也も、皆なそれに賛成しました。

俄かに作爺さんの舟は海の中へ卸されました。熊田先生は棹を取つて、ぐつと押したので船はザザと音を立て、砂を離れて浮び上りました。

「それでは行つて来るよ。妻さん、心配しないでいらつしやい！」と作爺さんは元氣よく言ひました。

「伊吹ちゃん、待つてらつしやいよ！」と時也は櫓を押しながら言ひました。

「明ちゃん、お父さまの歸るまで眠つてしまつては駄目ですよ。」と熊田先生は笑ひながら云ひました。

舟には大きな提灯が棹に吊されて、立てゝありました。グイ、グイ、と櫓を漕ぐ音と共に、エンサ、ヨンサ、といふ掛聲が段々遠くなりました。

「作爺さん……」と伊吹子は呼びました。

「おうしい……」と答へた聲が微かに聞えた時、もう舟の提灯は浪の紆りに見え隠れしてゐました。

二人はおツ母さんの兩の袂に縋りながら、ちつと海の方を見てゐましたが、提灯の火は段々／＼星のやうに小さくなつて、果てはそれさへ見えなくなつてしまひました。

「さア、お家へ歸つて、又た暫くしてお迎ひに來ませう。」

おツ母さんは、さう云つて二人の手を引いて丘の方へ行きました。

松の樹の所から振近つて見た時、もう海の上は眞黒でした。

遠い／＼沖の方から港の方へ入つて來る汽船の青い電燈が、きら／＼と光つたのを見た明次は、

「汽船だ、汽船だ。お父さまは、あれに乗つてるんぢやないかネ。」と途方もない事を言つたので、

「そんな事があるもんですか、あの汽船は岬よりもすつと／＼向うの方です。」とおツ母さんは教へるやうに言ひました。

「ねえ、汽船は、すつと向うの方です。」と伊吹子が、おツ母さんに味方をしたので、明次も負けぬ氣になつて、

「だつて、汽船に乗つてゐるかも知れないでせう。乗つて居ないツて誰も言つ

星の子供

百田宗治先生著

童話・童話集

美しい表紙・口繪原色刷・挿
 畫數葉・可愛しい本です
 乙部孝・武井武雄先生の
 定價壹圓廿錢・郵税八錢

秋庭川野口川小江小菊久小
 田雨俊之代浩未正太
 藤島保米地川口野庭
 政田田米地川口野庭
 春二太夫郎雄寛明換子二介彦雀

白中豊野福濱福吉山百福
 村鳥島與村田田田幸宗大
 上村田士田田口島與村鳥
 康二暮宗大
 文郎鳥治郎夫介情雄湖吾

現文壇に於いて童話に筆を執る小説家、詩人二十三
 大家の作、收むる所二十六篇、悉く寶玉にも比すべ
 き名作真に藝術的童話の精髓をなす。兒童讀書界に
 一大曙光を與ふるものなり。地上樂園としての童話
 時代に住む美しき反映、又懐しき搖籃の追慕として、
 この集は人生に與へられたる永遠の光である。愛し
 くも又美しきわが子の唯一の友として如何なる家庭
 にも必須なものであると共に、勉學の餘暇に兒童の
 樂しむ絶好の書である。

大六四六
 刷色五
 繪口刷
 裝雄武井
 幀十二圓二金
 繪口幀裝雄武井
 本美葉數畫挿繪口刷
 入函金天頁百四判大六
 本美葉數畫挿繪口刷

現代童話選集

現代童話の粹を集め精を凝せる一卷

堂 步 一

一五一九五京東替振
 番七二四四町番話電

雜町田高外市京東
 地番二七四谷ケ司

—にほごたろり—

「来ないんですもの。」
 と、申しました。

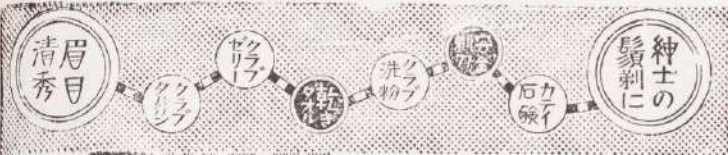
「だッて、汽船の方が、岬よりも、サツと向うですもの。」と伊吹子も負けずに
 言ひました。

「向うであつても、もしお父さまが風に吹流されてゐて、助けられたのだった
 ら、あの汽船に乗つてゐるかも知れんでせう？」

明次は飽まで理窟ッぽく云ひました。

「そんな事を言ふものぢやありません。」

おッ母さんの式江は此るやうに言ひました。それはおッ母さんの心の中にも
 美しい舟が沖の方へ流されたのではないか知ら？ と密かに心配してゐたから
 でありました。



製法は科學的
効力は徹底的
信用は世界的

クラブ 煉菌磨

便利なる押出し
チューブ入發賣
非常なる歡迎!

大正八年十月十六日
大正十一年二月六日
大正十一年三月一日發行(毎月一回一日發行)

東京 キンノツノ社 發行